

歯学部ニュース

令和2年度第1号 (通算137号)

特集 入学を祝して
歯学部生の活動

目次

特集1 入学を祝して	1
歯学部長 前田 健康・副病院長 小林 正治	
入学者のことば	4
歯学科1年 山崎 葵偉	
歯学科1年 清水 香奈	
口腔生命福祉学科1年 吉田 真綾	
口腔生命福祉学科1年 小澤まどか	
顎顔面再建学講座 組織再建口腔外科学分野 大学院1年 野澤 舞	
歯科矯正学分野 大学院1年 岩間 基	
口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年 山田 真子	
口腔生命福祉学専攻博士後期課程 小松 彩夏	
入学おめでとう 入学者名簿	10
令和2年度 歯学部歯学科	
令和2年度 歯学部口腔生命福祉学科	
令和2年度 歯学部歯学科 2年次編入生	
令和2年度 歯学部口腔生命福祉学科 3年次編入生	
令和2年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻（博士課程）	
令和2年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻（博士前期課程）	
令和2年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻（博士後期課程）	
特集2 歯学部生の活動	12
SSSV報告 久保田 瑞穂・五十嵐 理沙	
留学生紹介 Kiyoko Nelida Suzuki Barrera・Razi Saifullah Ibn Belal	
歯学部生の今 歯学科 2年 稲田 衡一／歯学科 2年 小杉 沙綺	
歯学科 3年 金岡 史也／歯学科 3年 鍵本 朱里／歯学科 4年 小林 航大	
歯学科 4年 門倉 朱音／歯学科 5年 伊藤 多市／歯学科 5年 早川 里佳	
歯学科 6年 青木翔太郎／歯学科 6年 齋藤 瑠郁／口腔生命福祉学科 2年 島村陽南子	
口腔生命福祉学科 3年 谷川 友菜／口腔生命福祉学科 4年 中村 夢衣	
部活動紹介	33
サッカー部 成瀬 道春・は～もに～プロジェクト 坂田 政貴	
国際的視野を持つ研究者	35
西 真紀子	
大学院へ行こう	39
永田 量子・松岸 葵・山本 悠	
学会受賞報告	42
前川 知樹・市川 佳弥・長谷部大地・原 実生・皆川久美子・遠藤 和樹	
枝並 直樹・田村 光・河原田壮史・木村 龍弥・高地いづみ・長崎 司	
中村 彬彦・羽賀 健太・鈴木 裕希・清野 雄多	
新潟歯学会報告	55
辻村 恭憲	
研修医プログラムを修了して	56
齋藤 豪・工藤 莉奈	
総務委員会だより	58
前田 健康	
診療室・分野紹介	64
医療連携口腔管理治療部 副部長 新美 奏恵	
顎口腔インプラント治療部 副部長 荒井 良明	
野田 忠先生追悼文	66
大島 邦子	
素顔拝見	68
中村 健・平山 悟	
同窓会だより	71
有松美紀子	
教職員異動	72
令和2年度歯学部内委員会	77
歯学部各種委員会	80
編集後記	81





入学を祝して

歯学部長 前田 健康

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新潟大学歯学部に入學された皆さんに、新潟大学歯学部の教職員を代表して、心からお祝いと歓迎の意を表します。また保護者ならびにご家族の皆様にも心からお慶び申し上げます。皆様方のご期待にそえるべく、新潟大学歯学部で新入生の皆さんの能力をさらに大きく伸ばすことができるよう、私たち教職員も全力を尽くしたいと思います。新入生の皆さん、我々教職員ともに、日々進歩する歯科医学、口腔保健医療・福祉学を学び、新潟大学歯学部の新しい歴史を築いていきましょう。

新潟大学歯学部の強みとして、「問題解決能力を持った歯科医師養成と国内外の人材養成モデルの構築」、「口腔のQOL向上を目指した基礎・臨床研究」、「有病・高齢者への対応や歯科再生医療の実践」があげられています (https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/04/28/1341977_01.pdf)。新潟大学歯学部の教育目標は、「包括的医療を行うことのできる有能かつ感性豊かな歯科医師の育成、歯科医学発展のために指導的な人材および保健・医療・福祉に貢献する専門職業人の育成」であり、「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としています。君たちがこれから新潟大学歯学部で学ぶ講義、実習の内容は社会に出るときのスタートラインに立つための内容でしかありません。歯科医療人、口腔保健・福祉医療人として長い人生を過ごしていくには、日々進歩する学問を常に修得する必要があります。そのためには自ら学んでいくという態度が不可欠です。医療・福祉を目指す者にとっては、問題を発見し、自ら学習し、問題を解

決していくという学習形態（問題発見・解決型学習）が望まれます。

昨年の中国・武漢を端緒とする新型コロナウイルスの感染は、日本はもとより世界中に拡大しています。感染拡大防止のため、教育活動も含め、日常生活にも大幅な制限が加えられています。本学でも6月中旬までの第1タームはオンライン講義等による非対面型講義の実施、すべての実習・演習の中止ないしは延期、諸行事の中止となり、第2ターム以降、対面型実習等の実施の緩和がなされましたが、まだ通常の教育活動には戻っていないのが現状です。このような環境の中、私ども教員は通常と同じ教育効果をあげるべく努力しているわけですが、教員の力だけで今まで以上の教育効果をあげることができるかは、はなはだ疑問です。教育とは教員から学生への知識のみの教授とみなしがちです。辞書をひもとくと「教育とは知識・技能を修得させたり、人間形成を図ったりする目的で人に様々なことを教えること」とある一方で、教育を成功させるには被教育者（学生）の重要性も指摘されています。白石（2013）は「教育」は教えられる者がその教える者の行為やその内容を受け入れることによって、はじめて成り立つ（白石崇人：『幼児教育とは何か』幼児教育の理論とその応用1、社会評論社）と記しているように、教育とは教員と学生の共同作業です。

「明けない夜はない」という言葉があります。これは周知の通り、「苦しい時期を耐え忍べば、必ず明るい状態になる」という意味です。このコロナの時代、新入生のみなさんはどう過ごしたらよいのでしょうか。2020年5月22日の朝日新聞の天声人語に以下のようなコラムが載っていました。「かの万有引力の法則は、自粛生活から生まれた。

英国でペストが猛威をふるった17世紀、若きニュートンはロンドンを離れて郷里の村へ避難。わずか1年半の間に、引力のほか微積分と光学という画期的な発見をする。」「自粛中のニュートンは昼間、農場の納屋にこもった。穴から差し込む陽光は白いのに、壁に映るのが七色なのはなぜだろう。考え抜いた末、光の正体は屈折率の異なる線だと発見する。」そして、このコラムは「ここは発想を転換し、長い巣ごもり生活を前向きに受けとめよう」と続けています。

新型コロナウイルスの感染拡大で、政府から新しい生活様式が提示されています。これを機会に新入生の皆さんもこれまで受けていた教育から新たな教育に転換してみましょう。試験の前に丸暗記した事柄は試験が終われば忘却の彼方であったという経験をしたことがあることでしょうか。小・中・高校では教師から与えられた教材をひたすら暗記・学習し、試験に臨むという受動的な学習スタイルでした。しかし前述したように、これからの長い人生には自ら学び続ける生涯学習という観点が必要とされます。赤ちゃんがお母さんから食べ物もらう、いわゆる spoon feedingから、自ら食材を見つけ、調理していくself-cookingに転換していかなければなりません。このような学習形態の転換のために、本学部では早くからProblem-based learning (PBL)チュートリアルという学習方法を導入しています。このPBLチュートリアルにおいては教員は学習者の補助者にすぎず、学習の主体は学生であるという概念で、学習が進んでいきます。このPBLチュートリアルは自ら課題を見つけ、自分で調べ学習していくというスタイルです。例えば、ウイルスという言葉があれば、「ウイルスとはなにか、その種類は」「どのように増えていくのか」「どのように感染していくのか」「ヒトは感染に対してどのように防御しているのか」など、一つの事柄に対し、いろいろな疑問が湧き出て、それを知るとまた別の疑問が出てきて、指数関数的に知識が増えていくという学習スタイルです。この例でも分かるように、このPBLチュートリアルでは従来の〇〇学という学問の壁を乗り越え、いろいろな分野の

勉強をしていきます。逆に言うと、〇〇学のPBLチュートリアルはありえないのです。この新型コロナ感染拡大の中、何か一つでもいいから、キーワードを設定し、自分で調べてみましょう。きっと新たな発見があることでしょうか。このような教育手法の主眼が「学生自身が自ら学ぶ」ということにあるのはいうまでもありません。新潟大学歯学部教育の主役は、教員ではなく、皆さんです。

新潟大学歯学部は早くから教育改善を進め、全国歯科大学・歯学部教育モデルケースとなっています。特に患者様の御協力を得て行う臨床実習は実践的な技能教育として高い評価を受け、臨床教育のフロントランナーとしての地位を得ています。さらに、大学院教育でも政府補助金に裏付けられた教育改善を進め、学部レベルから大学院レベルまで、高い教育の質を担保し続けています。研究面の評価の一つとして科学研究費助成金の採択があげられますが、この助成金の採択率も非常に高く、本学ではトップに位置しており、研究能力の高い教員が君たちの学習支援にあたります。また歯学部校舎改修に伴い、新たな実習設備が導入・整備され、学生諸君の技能教育に活用されています。各種教材の整備・充実にも努めており、高い学習効果をあげるため、環境整備にも努めています。これらの素晴らしい教育環境を積極的に活用し、自分の能力をさらに高めるよう努力して下さい。

勉強の話ばかりでしたが、20代前後のこの時期、勉強だけでなく、クラブ活動、ボランティア活動などさまざまな社会経験をし、歯学部以外にも多くの友人を作り、教養のある社会人となるような人間性を磨いてほしいと思います。新しい生活様式の下、これらの活動は現時点ではこれまでのようにできないかもしれませんが、簡単ではないからこそ、皆さんの柔軟な発想が求められ、アイデアが活かされる貴重な経験となります。そして、社会の期待に応える医療人を目指し、これから充実した学生生活を過ごし、卒業時に今年度新入生および保護者の皆様全員で喜びを分かち合いたいと思っています。



歯学部入学おめでとう

新潟大学医歯学総合病院 副病院長 小林 正 治

新潟大学歯学部歯学科ならびに口腔生命福祉学科の新入生の皆さん、ご入学誠にありがとうございます。皆さんは、令和という新しい時代の初めての新生入生です。特に今年は、新型コロナウイルスの感染への警戒という環境下での入学試験となりましたが、その中で日頃の学習の成果を発揮し、難関を突破された皆さんに、心よりお祝いを申し上げます。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う措置として、心待ちにされていた入学式の中止を余儀なくされ、さらにはこの未曾有の事態の中での学生生活も様々な制限がかかる事態となり、新たな形での学びを始めることになりました。これはみなさん自身の人生にとっても、大きな転換点となるはずです。そして、こんな状況であるからこそ、自分自身をしっかり見つめ直していただきたいと思えます。

大学での生活は、皆さんがこれからの人生を生きていくための基礎を固める時期になります。高い志を持って、学業に励んでいただくことはもちろんですが、サークル活動やボランティア活動など様々な経験を通して、多くの人とかがわっていただきたいと思えます。そして、自分のアイデンティティを確立してください。アイデンティティとは何か？「自分は何者か」「自分はどのように生きているのか」といった問いに対して「これこそが

本当の自分だ」といった実感のことを自我同一性と呼びます。これがアイデンティティの確立です。

皆さんは、ドクターXという医療ドラマをご存知でしょうか？昨年の秋に第6シーズンがテレビ放映されました。皆さんは、受験でそんなものを見ている暇はなかったかと思いますが、私が大好きなドラマの一つです。その中で、米倉涼子さん演じる主人公の大門道子の決め台詞が「私、失敗しないので」です。とても私には言えません。失敗しない人間などまずいないわけですが、このセリフに込められた「私は、絶対に失敗しないぞ」という覚悟が医療の現場では大事なのだと思えます。そのためには、日頃から確かな知識と技量を積み重ねるとともに、心も鍛える必要があります。心を鍛えるとは、人を思いやる優しさや寛容さを身につけるだけではありません。自分の弱さを見つめる勇気も必要です。

是非、これからの学生生活の中で皆さんもいろいろなことを経験してください。チャレンジをしてください。失敗や挫折も人を大きくします。そして、様々なことをしっかりと考えて、人間性豊かな医療人としてのアイデンティティを確立してください。皆さんのこれからの活躍に期待するとともに、皆さんが楽しく充実した学生生活を送られることを願っています。

入学者のことば

入学者のことば

歯学科1年 山崎 葵 偉



私が幸楽苑というラーメン屋で合格を待っていたあの時から早6ヶ月、そして新潟大学歯学部に入學してから4ヶ月という月日が経ってしまいました。今年は新型コロナウイルスの影響で入学式が中止になったり、授業もオンラインで行うようになったりと異例の年となっており、先行きが不安の中過ごしています。私が入学手続きの準備をしていた時期はまだコロナウイルスによる影響はほとんどなく、そのために新しく初めて買ったSuicaに学食パスのお金を1万円分チャージし、都会の人のようにカードで素早くお支払いを夢に見ていました。しかし、例のウイルスの影響で学食は8月までの時点で1回しか食べていません。おまけに旭町キャンパスには学食がないということを知ったため、今年中に学食パス1万円分を使い切らなくては焦っています。また1年生の間は教養科目のために五十嵐キャンパスが拠点だったのですが、残念なことに2学期からも非対面授業の継続のお知らせが届き、五十嵐にいる意味がなくなりました。さらに未だに歯学部生全員の顔と名前がわかりません。新入生ガイダンス時に1回は会ったものの、ソーシャルディスタンスという名に基づいて一定の間隔で席に座っていたため、ほとんど友達をつくることができませんでした。

また、私は隣の長野県から来たのですが新潟はとにかく風が強い、天気が悪い、湿度が高いと長野とは全く違った環境が驚いています。しかし長野県にはない海が歩いてすぐの場所にあるというのはとても新鮮に感じます。初めての一人暮らし

は慣れていないこともあり辛いときもありますが、辛いという感情がある以上、楽しいこともたくさんあります。これからの大学生活も楽しいことばかりでしょう。

友だちをつくれないう、外出を控えているために新潟を冒険できないと文句を言えば切りが無いですが、入学してから今までの間に会ってきた歯学部の友だちはみんな楽しく面白い人ばかりでした。歯学部のみんとあって話すことができるのは2年次以降になってしまうとは思いますが、私の楽しみが1つ増えたのだと思ひましよう。早期臨床実習でもすべてパソコンを通しての講義となつてしまひ病棟には行けませんでした、その分より細かい説明を聞くことができ専門科目を学ぶまでのモチベーションにつながつたと思ひます。

最後に今年はずもが予想しないスタートになつてしまひましたが、私はたくさんの人に支えられて今、この場にいることができるのだと思ひます。このことを今後6年間、さらには卒業しても忘れないように過ごしていきたくひです。歯学部のみんと共に学び、生活できることがとても楽しみです。

入学者のことば

歯学科1年 清水 香奈



私が新潟大学に入學して早3か月が経ちます。しかし、私はまだ大学生になつたという実感があまりありません。というのも、新型コロナウイルスが猛威を振るっており、入学式もないままZoomでの非対面型授業が始まったからです。楽しみにしていた新入生研修や運動会も中止となり、私の思ひ描ひしていた大学生活を送ること

ができず、非常に残念です。私は今でも不安がたくさんあります。私の出身地である愛知県から遠く離れた新潟で初めての一人暮らしをすることはとても心細かったです。そのうえ、非対面型での授業だったため、6年間苦楽を共にする皆さんと会う機会もなく、不安でした。その不安な気持ちを高校時代の友人と夜遅くまで電話で話していたこともあります。この苦境を利用して、大学の授業の合間を縫って自炊をし、料理の腕を上げようと試みました。私が実家に暮らしていた時はほとんど料理をすることがなかったものの、このステイホーム期間中に様々な料理が作れるようになったことが唯一の収穫でしょうか？しかしこの状況を不安に思う1年生は私だけではないでしょう。早く歯学部の学生の皆さんと顔を合わせ、ともに学べる機会が来ることが待ち遠しいです。このコロナによる苦境を皆で一丸となって乗り越えたいものです。

さて、私がこの3か月間の中で一番印象に残っている授業は歯学スタディスキルズです。私は高校時代SSH化学部に所属しており、プレゼンテーションをしたり、レポートを書いた経験がありました。しかし、本格的に自分でテーマを決めて主題文を作るところからレポート作成をすることは私にとって初めての経験でした。私たち1年生はまだ歯科の専門分野について学んではいませんが、今後専門分野を学んだ際に大きくつながる有意義な授業でした。そして、研究内容をプレゼンテーションすることはかねてからの私の得意分野です。歯学スタディスキルズの授業は第2タームは対面型の授業かもしれないとのことだったので、皆の前でプレゼンテーションすることを心待ちにしていました。しかし、第2タームも非対面型授業となってしまう、研究発表会はZoomでの開催となりましたが、すごく感動しました。お互いの顔を見ることはできないものの、皆が発表者のプレゼンテーションに耳を傾け、積極的に質問をしている姿はとても勉強になりました。私自身も今後さらに積極的に授業に参加していこうと思うきっかけとなりました。これからの授業がますます楽しみになりました。

私は以前から国際交流に興味があり、入学する

前から新潟大学歯学部の特徴である短期海外派遣プログラムに参加したいと考えていました。新型コロナウイルスが終息した時にはぜひ参加し、物事を多角的に、そして視野を広く持つ力を養いたいと思います。

6年の間、常に高い志を持って様々なことにチャレンジしたいです。そして、新型コロナウイルスに負けずに充実した学生生活を送りたいです。

入学者のことば

口腔生命福祉学科1年 吉田真綾



早いもので1学期も終わり、あっという間に夏休みを迎えました。今回、「入学者のことば」の執筆というお話を頂き、大学生活にも慣れ、時間に余裕が持てるようになった今、これまでの思いを少し振り返ってみたいと思います。

私が初めて歯学に興味を抱いたのは、高校1年生の頃です。当時、私は新潟大学歯学部の6年生の方々に勉強を教わっており、そこで勉強以外にも多くの貴重なお話を聞かせて頂きました。留学体験や病院実習の様子、部活動のお話など近くで歯学部生の日常に触れることにより歯学に対する関心が高まり、自分でも調べるようになりました。1年生の夏休みにはオープンキャンパスに参加し、実際に具体的な内容説明や先生方への質疑応答を通して、入学後に学べることについて理解を深めることが出来ました。その他にもキャンパス内を一通り見学したり、バーチャルリアリティのトレーニングシステムで歯を削る体験をさせて頂いたりしました。こうした新潟大学特有の設備や雰囲気を感じ、私は、歯学はとても面白く、環境も整っている新潟大学歯学部に進学したいと決意しました。そこから大変だった受験生活を経て、今こうして一歯学部生として勉強できていることがとても嬉しく、誇りに感じます。

今年は新型コロナウイルスの影響で全ての授業が非対面型での実施となり、早期臨床実習の授業

では例年行われていた3つの実習を行うことが出来ませんでした。しかし、各診療科の先生方から写真や映像を含めた分かりやすいご説明や実体験を聞かせて頂き、医療従事者になる身としての自覚が高まると共に、将来の理想像について考えるようになりました。また、グループ討議ではコミュニケーションに焦点を当てました。普段よく耳にするコミュニケーションという言葉の本質的な意味や内容を知り、それを私たちは医療現場にどのように応用していく必要があるのか、議論を通じてまとめることが出来ました。1年生の早い段階から今後学年が上がり、実習をさせて頂く現場を体験し、将来を見据える機会があることはとても有意義なことのように思います。

これまで多くのことを教えて頂きましたが、その中で私が最も大切にしたいと考えていることは、「相手を想う」気持ちです。常に相手の立場になって考える。頭だけを働かせて解決しようとするのではなく、心も向き合わせて考える。相手を想う気持ちがあれば、自然と自分も想われるようになり、良い信頼関係を築くことが出来ると思います。

これから始まる大学生活。新しい人や物に出会い、自分の中で新たな世界が広がっていくことでしょう。仲間や先輩方、先生方と過ごす日々の時間を大切に、夢に向かって頑張っていきたいです。そして、4年後、私がもう一度このページを開いたときに私の理想像である「相手を想い、患者さんから慕われる」姿に、胸を張って近づけたと言えるように成長していきます。

入学者のこぼ

口腔生命福祉学科1年 小澤 まどか

新潟大学に入学してからあっという間に月日が過ぎ、前期が終わりました。今年は例年とは違い、入学式の中止や非対面での講義などであまりキャンパスに行くことができず、悲しいスタートとなってしまいました。初めの頃は新生活に慣れなかったり、履修登録やzoomなどの操作方法に

苦戦したりと、不安の多い毎日を過ごしていましたが、今では非対面のメリットも感じながらこの状況下で充実した日々を送っています。

金曜日の早期臨床実習もオンラインとなり、まず全国28大学歯学部が存在する診療科とその歯科的疾患をまとめました。それを作成していく中で、多くの病院の診療科の構成を学ぶことができ、分からなかった専門用語を調べることで、その後の各診療科の講義で生かすことができたと思います。最後にはグループ活動を行い、医療従事者としてのコミュニケーションの重要性や、病院の役割、患者から見た歯科医師の印象を学びました。まだまだ知らない学生もいる中で話し合いをし、発表をするのは緊張しましたが、様々な意見を聞くことができとても刺激になりました。実際に病院へ行き、ユニフォームや白衣を着て患者さんと接することはできませんでしたが、早期臨床実習やその他さまざまな講義で歯科を学び、少しずつ将来歯科衛生士として働く実感を持つことができました。専門的な講義以外の講義では、歯学部以外の学生と講義を受け、様々な知識や考えを吸収することができたと思います。また、非対面の講義は学生だけでなく先生方も非常に大変だったと思いますが、分かりやすい講義や明るくて楽しい講義、質問しやすい環境作りなど学生のことを思いやって講義をしてくださいました。

生活面では、サークルや行事もやはり例年のようには行われず、新潟大学のキャンパスライフはどんな感じなのかが分からない、知り合いが少ないということがとても残念です。そして前期だけでなく後期も非対面となり、五十嵐キャンパスで過ごすことも難しくなってきました。

このように、今年は例年とは全く違うスタートとなってしまい、これからもどうなっていくのかが分からない不安もあります。ですが、これから状況が良くなり対面での講義が行われることを願いながら、非対面でもモチベーションを下げることなく、勉強に取り組んでいこうと思います。そして、周りの学生と協力し、理想の歯科衛生士に近づいていきたいです。

入学者のことは

顎顔面再建学講座 組織再建口腔外科学分野
大学院1年 野澤 舞

今年の4月より、組織再建口腔外科学分野に入局しました野澤舞です。この度歯学部ニュースに執筆の機会をいただきましたので、入学者のことはとして入局までの経緯や近況をふまえ、述べてさせていただきます。

私が口腔再建外科に入局した一番のきっかけは、臨床研修先での多くの人との出会いでした。昨年の4月から9月末までの半年間、私は地元の南魚沼市にある魚沼基幹病院の歯科口腔外科で研修を行いました。学生実習で口腔外科領域に触れる機会が少なかったこともあり、大学以外の慣れない環境で研修をすることにはじめは不安を感じていましたが、指導医の先生方についていくのに必死になるうちにその不安は消え、やがて知識を得ることの楽しさが増していき、指導医の先生方への尊敬とあこがれへと変わっていきました。口腔再建外科に入局した今も感じるのですが、口腔外科の先生方は非常に知識が広くかつ専門性があり、不測の事態にも対応できる判断力と決断力を持っていると私は思います。また、口腔外科はその名の通り外科処置が多い分野ですので、観血的処置をするにあたって患者さんの全身状態の把握が必要不可欠であり、そのための知識と情報収集力が必要です。実際、入院患者さんの周術期管理は他科と連携して行う場面も多々あり、他分野の医療者と情報交換をできるだけ知識とコミュニケーション能力が必要です。魚沼基幹病院での研修は半年間と短期間ではありましたが、歯科衛生士はもちろん、医師や看護師、薬剤師、栄養士、ME、技師、事務も含め多くの職種の方々と関わることができたことは私の大きな経験の一つとなっています。もっと口腔外科を学びたい、自分はここでならもっと成長できると思ったことがきっかけとなり、私は口腔外科に進むことを決めました。

入局早々、COVID-19の影響で歯科の診療が制限されていた時期がありましたが、入局から約6

か月が経過し、最近では多くの症例を経験させていただいています。自分にとって大学院に進学することは大きな決断でしたが、大学の良いところは先生方それぞれのいろいろな考え方に触れることができる点だと思います。術式等の手技的な部分はもちろんですが、研究分野に関しても当分野は腫瘍班と顎変形症班に細分化されており、その分野のスペシャリストのそばで経験を積めることは、大変貴重な経験だと感じています。私自身も学会発表の機会をいただき、今準備を進めているところですが、日々新しいことに挑戦できる環境を与えていただいている医局の先生方には感謝しかありません。少しでも多く恩返しができるよう、また、自分にとっても大学生生活を充実したものにできるよう、これからも日々精進して励みたいと思います。

大学院に進学して

歯科矯正学分野 大学院1年 岩間 基



今年度4月より、新潟大学大学院医歯学総合研究科の歯科矯正学分野に入局した岩間です。私は、新潟県佐渡市出身で高校時代までは県内で過ごし、その後東北大学歯学部に進学しました。そして歯科医師国家試験合格後は、新潟大病院で研修医として1年間勤務し、歯科医師として一般的な治療を経験させていただくことができました。私が矯正の道に進もうと真剣に考えたのはその研修医の時でした。研修医として一般歯科に携わっていた間に、実際の患者さんを相手にすることで教科書では学べない臨床的な知識や技術に加えて、患者さんとのかかわり方などを新たに発見することができ、それらの面白さに気づき、病院や開業医でその道を究めようと思っていた時もありました。そんななか、矯正を専門にしている先生とお話をさせていただく機会があり、そこで矯正の難しさや学問としての面白さを教えてくださり、改めて矯正の道に進むことを決心するこ

とができました。

入学してから約4か月が経ちましたが、今年は新型コロナウイルスの影響もあり外来は一時停止となり、その間、矯正科の大学院生は自宅待機となっていましたので、例年より遅れてのスタートとなりました。そのため外来では今でも新鮮な発見があり、それらに興味を抱きながらも、いざ自分が治療を行うとなった際に同じようにできるのかという不安を抱えながら日々を過ごしています。矯正は専門性の高い治療ということもあり、入学してすぐ患者さんを配当されても治療にあたることはできないため、現在は、上級医の先生方の診療のアシストや新人教育という研修を通して、矯正治療に関する知識や技術を磨き、1年目の後半頃に始まる患者さんの配当に備えて土台作りに努めているところです。2年目からは研究が本格的に始まりますが、矯正科では臨床研究、基礎研究のどちらかを選択することになります。研究内容は現在模索中ですが、私はかねてより不正咬合を有する患者さんが矯正治療によりその治療前後でどう変化するのかについて興味がありましたので、そうした疑問に少しでもアプローチできるような臨床研究を設計できればと考えています。

最後に、臨床においても研究においてもまだまだ知識・経験不足を痛感する毎日ですが、指導していただいている上級医の先生方や同じく大学院に進学してきた同期の先生、矯正科で診療の補助をしてくださる衛生士の方々への感謝を忘れず、今後も診療や研究等に励んでいこうと思いますので、宜しくお願いいたします。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年

山田真子

私は3月に口腔生命福祉学科を卒業し、この春、口腔生命福祉学専攻博士前期課程に進学しました。今年は新型コロナウイルスの影響で朱鷺メッセでの卒業式・入学式も行われず、ほとんどの講義はオンラインや課題提出のみとなっています。

私は、医療・保健・福祉の連携におけるチームケアを行うため専門知識、技術を身につけたいと思い、大学院進学を選びました。大学在学中の講義や実習を通して徐々に周術期や摂食嚥下の分野に興味を持ち始めたことがきっかけです。多職種連携のなかで歯科衛生士として、自分には何ができるのか、どんなことが求められるのかと考え始めました。

現在私は、摂食嚥下リハビリテーション学分野で諸先生方のお世話になり、臨床で摂食嚥下障害を持った入院患者さんと携わりながら大学院生活を過ごしております。最初は右も左も分からず戸惑うことばかりでしたが、先生方に丁寧にご指導していただきながら、毎日新しいことを知ることができ、とても充実した毎日を過ごしています。しかし、臨床の場面では自分の知識不足を痛感する毎日です。もっと成長できるように一生懸命努めていきたいです。

現在は、対面での授業が行われておらず同級生との交流ができず寂しいものですが、授業のレポートの締め切りに毎日追われています。今は、人と会う機会が減り、オンライン飲み会などで学部同期の話聞き、さまざまな場所や分野でそれぞれが活躍していることを知り、私も頑張らなければという思いが強くなりました。

大学院に通いながら歯科衛生士として仕事を始めてから4か月が経ち、ようやく新しい生活にも慣れてきました。当初は自分の思い描いていた大学院生活とのギャップもありましたが、今は素晴らしい環境で学べることに感謝しています。そして先生方のご指導・ご助言のお言葉を頂きながら、大学院進学の道を選んで良かったと思える有意義な大学院生活を送っていきたくと思っています。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士後期課程

小松彩夏

今年度から博士後期課程に入学いたしました。口腔生命福祉学科の11期生として卒業後、2018年

度に博士前期課程に進学し、後期課程に進学するかを悩みながら2年間を過ごしました。後期課程に進もうと思ったきっかけはいくつかあります。そのうち一つは前期課程ではじめた脳に関する研究・勉強が足りていないからです。2年間では時間が短く、自分の研究分野を知ることで精一杯でした。これからの3年間では神経化学の基礎知識をしっかりと身に着け、さらに研究者として生きていくために必要な考察力を磨いていきたいと思えます。もう一つは日本学術振興会のDC1に採用されたためです。前期課程でお世話になった照沼教授のご助力のおかげで採用が決まりました。自分の研究に関して初めてお金をいただき、責任をもって実験を行っていくという目標ができました。

入学してから早いことにすでに5か月が経とうとしています。新型コロナウイルスで研究室にいつも通り通うことができない時期もありました。現在、なかなか収束しない日々が続き、学会もオンライン開催になっています。今後もこの状況が続く可能性がありますので感染対策を続けつつ、しかし後期課程は変わらず3年間なのでしっかり実験を行っていきたいと思っています。

後期課程でも前期課程同様に口腔生化学分野でお世話になります。これからの3年間で勉強・研究を頑張ることはもちろんですが、将来どのような研究者になっていきたいのかを考え、自分の理想の研究職に就けるように努力していきたいと思っております。ご指導の程よろしくお願いたします。



SSSV報告

ペンシルベニア大学SSSV報告

歯学科6年 久保田 瑞 穂

私は、今年の2月下旬から2週間、アメリカのペンシルベニア州フィラデルフィアにあるペンシルベニア大学でのSVプログラムに参加させていただきました。

ペン大のプログラムは、臨床実習の見学・アシストがメインで、セミナー聴講をする日もありました。そして、1日の終わりには英語でのエッセイが課されます。質疑応答などをしているとあっという間に時間が経ってしまい、なかなかハードな日々でしたが、それ以上に得た知識や経験は大きなものでした。

私が特に印象に残った点は2つあります。1つ目は、学生の主体性です。現地の学生と最初に会話をしたとき、彼らは皆自信に満ち溢れていて、同年代とはとても思えませんでしたし、口腔外科では、残根や臼歯の難抜歯もほぼ自力で診療を行っていました。マイクロスコープやルーペも当たり前のように使いこなしていたのも衝撃的でした。講義でのディスカッションやプレゼンを見ていると、より良い診療を行うために、妥協を許さない姿勢で学んでいることがよく分かり、強い刺激となりました。2つ目は、日本とアメリカの診療内容の違いです。学生の診療を見学した際、60代で上下顎FDの患者さんが多いことに驚愕しました。日本との違いを先生に話したところ、保険制度の問題もあるが、教育格差による問題も大きいとのことでした。背景に、環境、経済、民族など多様な問題が複雑に絡み合っていることを痛感

させられた瞬間でした。

また、ペン大で研究をされている高度口腔機能教育研究センターの前川知樹先生にもお会いすることができました。前川先生は、研究室を案内してくださったり食事に誘ってくださったりして、私たちのことを大変気にかけてくださいました。他にも、エンドの名医と言われているキム先生や、ペン大で指導医をしている日本人の先生ともお話しする機会がありました。

現地の学生は非常に優しく、すぐに打ち解けることができました。診療と平行して治療内容の説明をしてくれたり診療の合間には雑談をしたりし、どの国の学生も勉強に対する悩みや情熱は変わらないことを感じました。



COVID-19が猛威を振るい始めた中でのSV参加となり、ペン大も私たちの帰国直後から休校になるとのことでした。そんな中、無事に全てのプログラムを終えて予定通り帰国できたことは、奇跡に近いと感じています。引率して下さった前田学部長を初めとする、SVに携わって下さった全ての先生方に、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

私がSVに参加するのは、スウェーデンのマルメ大学以来で2回目です。北欧とは全く違う雰囲気や教育スタイルを学び、充実した日々を過ごすことができました。「海外の歯学部」と一括りに言っても、大学によって千差万別です。海外の歯学部の様子を学んで現地学生と交流を図る、そんな経験を学生の期間にできるチャンスは滅多にな

いと思うので、皆さんも是非SVに参加してみませんか。自分の価値観がガラッと変わる一歩になるかもしれません。



2020年SV トロント大学歯学部を訪問して

歯学科5年 五十嵐 理 沙

2020年3月3日～17日の14日間、カナダにあるトロント大学歯学部へ派遣していただきました。トロント大学は今年度初めての派遣先だったことに加え、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、直前まで渡航が危ぶまれ、不安を多々抱えながらの出発となりました。ホテルトラブルにも見舞われ、波乱の幕開けとなりましたが、他国への派遣が次々と中止になった中、無事渡航・帰国でき、その後感染することもなく元気に過ごせたことが今回の何よりのお土産だったと思います。

トロント大学は世界でもトップレベルの大学ですが、歯学部を見ているとそのことを非常に感じました。医学部や歯学部に入るためには、まず四年制大学を優秀な成績で卒業し、入試に合格しなければいけないそうで、世界各国から非常に優秀な学生が集まってきているなと思いました。日本では歯科医師過剰、歯科医師の未来は暗いと言われてしまっているのが現状ですが、カナダではdentistはステータスがが高く、非常にいい職業だそうです。見聞を広げるためには、日本だけに固執せず、世界に目を向けて幅広い視点から物事が考えられることが大切だと感じました。

メンバーが2年生と私ということで、講義と臨床をミックスしたプログラムが多かったのですが、フレキシブルなプログラムでとてもよかったですと思います。

講義では、お菓子を食べたりコーヒーを飲みながらも学生が積極的に授業に参加し、質問していた姿が印象的でした。自分自身がすでに学んだ内容のものも多く、日本の講義との共通点や違いを知る良い機会となりました。先生が患者役、学生が歯科医師役でさまざまなシチュエーションを想定したロールプレイなどを行う授業（PBLのようなもの）も充実しており、大変興味深く拝聴しました。

臨床系の実習は、主にprosthodonticとインレー実習を見学しました。部分床義歯の実習では、いくつかのグループに分かれて症例検討をしていました。模型の欠損部が実際に4年生のときに使用したものと同じだったこともあり、親近感がわきました。

クリニックも間近で見学させていただき、大変貴重な経験となりました。とくに歯周オペとインプラントが印象に残りました。インプラントは日本とは違って、主に歯周病科が一貫として行っているようで、自由診療であるものの比較的メジャーな治療とのことでした。

クリニックでは、歯学生のクリニック(student clinic)と歯科医師のクリニック(Graduate clinic)の両方を見学させていただきました。学生は卒業までに充填(修復)を約100本、抜歯何十本、インプラントも最低一本こなさなければならないということで大変驚いたと同時に、自分ももう患者を診る学年になるということもあり、身の引き締まる思いでした。

最初の週末は、高速バスにてはるばるナイアガラの滝に行きました。世界三大滝の一つというだけあり迫力満点で、夜のライトアップも非常にき



れいでした。2回目の週末はコロナの影響であらゆる観光スポットが閉鎖されてしまったため、散歩やカフェでのんびりしたり買い物したりして過ごしました。

昨年にマルメ大学、今年トロント大学と2年連続でSVプログラムに参加させていただきましたが、特に今回は英語圏の国であったこともあり、自分の思いをうまく英語で伝えられないもどかし

さをひしひしと感じました。日本にいるとなかなか英語に触れる機会がないですが、これからも英語にはしっかりと向き合っていかなければならないと改めて感じました。

このような機会を与えて下さった方々に改めて感謝申し上げます。ぜひ来年度以降もトロント大学歯学部とのSSSVが続くことを願っております。



留学生紹介

Rediscovering the roots of my family and learning from this beautiful dream

硬組織形態学分野 Kiyoko Nelida Suzuki Barrera

My name is Kiyoko Suzuki Barrera, I am Chilean-Nikkei (Japanese descendent) third generation. My grandfather and grandmother were Japanese, and I born and grew up in Valparaíso, Chile. Since I was a little girl I had the dream to visit Japan but I never thought that I could study and live here.

I studied Dentistry, then Pediatric Dentistry in two-year residency program (Specialty), and Master degree in Neuroscience in my home city Valparaíso, during that time I realized that my passion was clinical practice and also research. With the inspiration and guidance of my Professor in Chile, I pursued to continue my studies, and I thought that it was the perfect time to unite my love for research and my dream as a child of coming to Japan. JICA scholarship program for development of leadership of Nikkei has given me the chance to follow my dream and now I am in the 2nd year of PhD in the Anatomy and Cell Biology of Hard Tissue Department of Dental School at Niigata University.

During these almost two years, I have really enjoyed the incredible landscapes, food and culture of Japan. Last year I was able to climb and reach the top of Mount Fuji, participate in the Niigata summer fes-

tival dance, see the wonderful fireworks in Nagaoka, enjoy the fun Okinawa, and observe and appreciate the amazing sakura during spring. Also I am learning more about Japanese culture through visiting temples, museums and castles, attending to tea ceremony, learning to wear a kimono, and joining Ikebana classes.



I am very grateful for everything I have learned in the faculty, from all the people with whom I have crossed my path, Professor Dr. Hayato Ohshima and Dr. Hiroko Ida who generously allowed me to be part of the lab, teaching me new techniques and skills, supporting me every day and encourage me to be better; all the lab members for their kindness and support, especially for my laboratory partner and great friend Sanako who has been very important to me since I arrived in Japan and we have enjoyed beautiful and unforgettable moments; and all my international friends who

are always willing to give me good advices and love.

This time in Japan has been beautiful, I feel very blessed to be able to share this experience with my husband and to be living this adventure together, we have grown through the happy moments and the adversity that being away from our family implies. This experience has strengthened us and made us reaffirm how important it is to give love to those around us and appreciate with gratitude the people and moments that we live every day.



From uncut rocks to shiny gems: my experience at Niigata University

う蝕学分野 Razi Saifullah Ibn Belal

The title might sound a bit strange, but this is my impression of the student life at Niigata University. My name is Md Razi Saifullah Ibn Belal. It's a long traditional name and difficult to get. So, I am called 'Razi' by my acquaintances. I come from Bangladesh. I finished my graduation in dentistry from Pioneer Dental College under Dhaka University in 2010 and completed my internship in 2011. In 2013 I went to Hamburg, Germany, for post-graduation. I studied part-time, travelled around Europe and completed my MPH course in 2017.

During my study in Germany, I often missed the clinical practice where we get the chance to treat and cure someone directly. So, with the advice and recommendation of my Bangladeshi professor, I contacted the division of Cariology, Operative Dentistry and Endodontics for an opportunity to study and research.

I started my doctoral course in the last week of September 2018. Although I have been living abroad since 2013, I needed to adapt to the culture and etiquettes in Japan. From my previous experience in Germany, I was focused on learning the language in my early days. I went to Cross-pal Niigata for extra lessons and, it became easier to communicate with my teachers and fellows. I realized that if you shy away from talking and afraid of making mistakes, you will not be able to learn a new language

well.

Japan is famous for dental research, and everyone is hardworking, focused on the perfection of the job in hand. In my first few weeks, I learned basic laboratory procedures and protocols. Then with the kind guidance and patience of my supervisor, I was able to learn new protocols related to my research. I also read a lot of research papers for a better understanding of my research and to refine research protocols.

Within the next few months, I got data from my analysis and arranged them to make a poster. I went to Taipei, Taiwan, with my supervisor and presented my poster in a bilateral dental symposium. I have enjoyed my time in a new country and learned new aspects of dentistry. From my interest to learn new things, I also took part in different experiments of my teachers and seniors. Also, being a part of a clinical department, I have learnt clinical procedures in the university hospital from my teachers.

Japan is a land of natural beauty with lots of places to visit in different seasons. These seasons come with various festivals and ever-changing nature. As an international student, it is very interesting and enjoyable at the same time. I have visited a few scenic locations of Tokyo, Osaka, Kyoto, Yamagata and within the Niigata pre-

fecture. Each time I was mesmerized by the beauty of those places. Another unique aspect of living in Japan is the variety of local cuisine available in different regions. The efforts put into creating those cuisines make them very palatable and appealing to the eaters.

All in all, in my opinion, if anybody is willing to work hard and learn a lot, Niigata University is the right place for them. The

university provides a sound platform and right tools for an uncut rock like aspiring foreign graduates to become a shiny, successful gem. With the right focus and motivation, one can certainly attain the knowledge and qualities necessary to become a successful individual in future. I hope I can successfully complete my study here and return to my country with expertise which will benefit me to achieve my goals.



歯学部生の今

歯学科 2年 稲田 衡一

新潟大学歯学部に入學して早くも1年が過ぎ、歯学部としての専門科目を学び始める2年生になりました。1年生のときに私は、先輩から「歯学部生は2年生からが本番で、勉強も部活も格段にやるが増えるため忙しくなる」と教わりました。だから当時の私は、来年の自分は一体どれだけ忙しい毎日を過ごすことになるのだろう、と考えていました。そして現在、私は2年生になり、それなりに忙しい日々を送っています。しかし、それは1年生の頃に思い描いていたものと全く異なる日々でした。歯学部棟で勉強するはずが、自宅学習を余儀なくされ、忙しくなるはずだった部活動は活動停止になり、代わりに毎週出される山のようなレポートをこなす毎日です。季節と授業は進んでも、春休み以降は大学に通えていないため、正直、まだ春休みが終わった気がしません。新型コロナウイルスの流行はこれからも続くと考えられるので、大学構内も当分は閉鎖されたままだと思うと気が遠くなります。他方で、小学生、中学生、高校生はすでに学校が始まっており、社会人も多くの会社で通常勤務が再開されていることを考えると、大学生だけがいつまでこの状況に耐えなければならないのだろう…と思わないこともありません。これは、おそらく私だけでなく、多くの大学生が同じように考えていることだと思います。

しかし、もしこの状況で大学が再開されれば、大学は人と人との接触の機会が頻繁に起こる場であることから、大学生はその分、新型コロナウイルスに感染しやすくなるでしょう。そして、新型コロナウイルスによって引き起こされるCOVID-19は未知の部分が多く、その症状が完全に把握されたわけではないので、危険性も明らかではありません。加えて、治療薬やワクチンも開発されていないというのが現状です。従って、学生を保護するという点から鑑みると、このコロナ禍における大学側の判断は間違っていないと考えられます。そして私たち大学生は、大学側の対応の意図を汲んで、不要不急の外出を極力避ける生活を今後も続けていくべきであると考えます。

私は今年の5月で成人したので、今夏は二十歳の夏として、私にとって特別なものになるはずでしたが、このような自粛の日々を送ることになってしまい、非常に残念に思います。しかし、私が不要不急の移動をしないということが、新型コロナウイルスの感染拡大の抑え込みに少しでも繋がると信じて、ディズニーランドやUSJに行きたい気持ちをグッと我慢して家に引きこもっています。先ほども申しましたように、私の中では未だに春休みが続いていますが、いつの日か開けることを信じて、とりあえずこの原稿を書き終えたら、テスト勉強に取り掛かろうと思います。

歯学部生の今

歯学科2年 小杉 沙綺

2年生に進級して、学習内容が教養的なものから専門的なものに変化しました。例年どおりでしたら、それに伴い通学するキャンパスも旭町キャンパスへと変わり、歯学部の先生方から直接講義していただけるようになるので、それを楽しみにしておりました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、今年はオンライン授業となってしまいました。先生方の講義を直接聴くことができず、さらに、お会いする機会が少ないが故にお顔とお名前が一致していない先生方もいらっしゃるのでは、少々残念な思いです。しかしながら、変則的なこの状況下でも、私たちの学びが有効なものになりますよう、たくさんの工夫を凝らし、授業をしていただいております先生方には、深く御礼申し上げます。

上述のとおり、今年はオンラインにて授業を受けていますので、なかなか同級生に会う機会もなく、少々寂しい毎日を過ごしております。授業の形式は、Zoomを用いて講義をしてくださったり、事前に配布してくださったレジュメを用いて自主学習を進めたり、各科目にて様々ですが、毎回の授業ごとに理解度を図るための課題があり、毎週それに取り組みつつ、理解を進めております。同級生と直接会う機会は少なくなっておりますが、自主学習での理解に自信がないときや、課題に解答するうえで生じた疑問などを、電話で話し合ったりして、積極的に連絡を取り合っています。その際、勉強と関係のない日常的な会話もして、お互いの近況報告をしたり、くだらないことで笑い合ったりすることが、コロナ禍の少々窮屈

な日々の息抜きとなっております。また、先輩方からもLINEなどのコミュニケーションツールを用いて、日々の勉強やテスト勉強のアドバイスを頂き、1人で学習していることによって生じる不安を解消することができています。自分の勉強でお忙しい中、とても有用なアドバイスをくださる先輩方にもとても感謝しております。

また、部活動に関しましては、なかなか活動することができていないのが現状です。現在は、大学に感染症対策を提出し、許可された部活動から活動を再開していますが、私の所属する硬式テニス部はオフシーズンとも重なり、昨年度末から練習ができていません。また、第52回全日本歯科学学生総合体育大会も中止となってしまい、楽しみにしていた分とても残念でした。この文章を執筆している8月末時点では、10月から活動が再開できる予定ですので、次の大会に向けて練習ができることがとても楽しみです。

このように、今、授業や部活動などの様々な日常が従来の形で行うことができなくなっています。日常が日常でなくなった今、今までの生活に対してのありがたみを感じ、その日常がはやく戻ってきてほしいと願うばかりです。それでも、新しい様式に適應して、今までと同等のクオリティで学習を進めていかなければなりません。新型コロナウイルスの流行が1日でも早く収束し、日常が戻ってくる日を願いつつ、新しい環境での学習に食らいついていけるよう、これからも努力していきたいです。

歯学部生の今

歯学科3年 金岡史也

私達歯学科54期はこの春無事3年生へと進級することができました。ここまでの2年間はそれぞれのキャンパスでの生活に慣れることに精一杯であっという間に過ぎてしまいました。そして3年生では2年生の時よりもより歯科に関係してくる専門科目を学び始めて、身が引き締まる思いで日々を過ごしています。

早いもので既に前期が終了しましたが、その中でも特に印象深かったのは人体解剖学実習です。やはり3年生といたらこれだと思えます。まだ全ての日程が終了したわけではないものの、その内容は非常に濃いものでした。例年言われている通り、教科書で図や文字の羅列で説明された知識と、実際の御献体とでは細かい位置やその関係性が個体差などによって異なり、複雑なものになっていました。事前の知識だけでは足りない、その為日々の授業の復習の重要性を感じています。口頭試問では、毎回緊張感に包まれながら自分の知識を答えていく、最初の授業でも説明されましたが先生との真剣勝負といった感じでした。残り1回ありますがまたあの張り詰めた空気の中に放り込まれると思うだけでも胃が痛くなってきます。そんな人体解剖学実習は今年特例で週3回あり、

非常にハードなスケジュールでしたが残り僅かとなりました。当然のことですが気を抜かずに最後まで予習復習を欠かさず取り組んでいきたいです。

今年は異例のスケジュールによって授業の開始が遅れたり、対面授業の中止によって普段よりも自学自習を余儀なくされました。もちろん基本的には講義を先生方の前で受けることの出来ないデメリットの方が大きいのですが、これは自分の勉強に対する態度を改める非常に良い機会になったと思います。非対面授業特有の発言のしやすさなど、いつもとは違う形態で行われたことで全てがマイナスになった訳ではないと感じました。

歯学部は6年制度なので正直まだ3年生、という感覚でいたのですが他の学部の同級生がもう3年生になってしまったと言っているのを見て、軽い気持ちでいたけれども学生生活は長くないのかもしれないと考えるようになりました。いつかは自分も社会人になっているということを考えることもありませんでしたし、現実味もまだ感じてはいませんが、その時に困らないように今丁寧に勉強していこうと思います。

歯学部生の今

歯学科3年 鍵本朱里

私たちは2年生を無事終え、3年生になることができました。今年は新型コロナの影響により、対面授業はほとんど無くなり、オンライン形式の授業が行われています。オンライン形式の授業が始まった当初は多少不安もありましたが、各先生方が非常に色々考えて授業をして下さっているおかげで、しっかり勉強を進めることができている。

3年前期で最も印象的な科目は、なんと言っても人体解剖学実習です。今年の前期はオンライン形式の授業が大部分を占めていますが、人体解剖学実習は対面で行われています。人体解剖学の基礎知識は2年生の時に勉強しており、その時にも教科書上の基礎知識を3次的に理解するように努めていました。しかし、実際にご献体を前に解剖を進めていくと、今までの理解では難しいこともあり、知識をただ暗記しているだけの2次的なものであることに気がつきました。各ご献体には多少の差異があり、その点を考慮した上で3次的な知識として定着させることは難しいと日々感じています。そのため、各実習に向けた日々の予習は非常に重要です。この段階で理解をしておくことで、実習をスムーズに行うことができま

す。また、全4回ある口頭試問も残すところあと1回となりました。口頭試問のある日は、いつもとは異なる緊張感と不安が入り混じった雰囲気です。今年の解剖学実習は週3回あり、1回口頭試問が終わっても次の口頭試問がすぐにあるので、なかなか気が休まりませんが、毎回充実した時間を過ごすことができます。解剖学実習という貴重な実習をさせていただいていることに感謝の気持ちを忘れずに残り数回頑張りたいと思います。

学年が上がると勉強や実習が増えるので、自由に使える時間は少なくなってくると思います。そのため、自由な時間をどのように過ごすかが重要だと思います。試験前に勉強すればいいと考えていると、国試の時などに苦労すると思うので、今から少しずつ知識を積み重ねていかなければいけないと思います。また、これからは単なる知識の暗記だけではいけないので、異なる科目の知識を統合するために、それぞれの事象や現象の関連性を考えて勉強していきたいと思います。

最後になりましたが、これからも学ぶべきことはたくさんあるので、残り3年間も日々頑張りたいと思います。

歯学部生の今

歯学科4年 小林航大

2020年春、辛かった3年生の実習を終え、私は希望に満ち溢れた春休みを過ごしていた。忙しくてできなかった旅行をしたり、4年の前期で最後と決めていた陸上競技の練習をしたり、様々な予定に心を躍らせていた。しかしそのタイミングでの新型コロナウイルスの流行である。私の春休みの予定はすべてキャンセルとなり、4月から始まった学校生活も従来のものとは大きく異なったものとなった。今回は学校生活がどのようなものに変わっていったかを書いていきたいと思う。

まず授業について。これは現在どの大学でも主流になってきているオンライン授業である。Zoomというアプリを用いることがほとんどであるが、授業によっては録画した講義動画をホームページにあげてくださるタイプの講義も存在する。家にいながら講義を受けることができるという絶大なメリットが存在するが、話し合いの授業の場合、会話が進まないのではや学校に行ったほうが楽では？という気持ちになってしまうというデメリットもある。

実習については学生が集まらずに行うというのは不可能である。そのためフェイスシールドを着用したり、実習前に検温を行うことで新型コロナウイルスの感染を予防している。このような予防策を講じてはいたが実習がスタートできたのは6月中旬のことである。それまではずっと自宅にこもり、オンライン授業に打ち込んでいたためこれが体にこたえた。引きこもり生活からのいきなり1～5限の実習。最初のうちは体がとんでもなく疲れ、昼夜逆転生活が一発で治ったのを覚えている。実習ありがとう。

次に部活動について。これに関しては軒並みす

べての行事、大会が中止となった。特に私たち4年生の代は引退の年であり、大会などは最後の大会となった人も多いただろう。ましてや今回のデンタルは新潟開催であったため、なくなってしまったのはとても名残惜しいことである。それだけでなく普段の練習なども禁止になってしまった。私の所属する陸上部では7月から練習が再開できたが、まだ再開できていない部活も多くあるらしい。そのためひっそりめると引退した同級生が多かったのではないだろうか。(私も含め)

最後に私生活である。ここが一番変わった部分である。今までであればテストが終われば飲みに行き、実習が終われば飲みに行き、何も終わってなくても飲みにもみんなで行っていたものだが、それもなくなってしまった。運動会などの行事もすべて消え、普段の疲れを癒す楽しみ事がすべて消滅するという目も当てられない状態になってしまった。今回のこの原稿の依頼を受けた際、写真もあれば添付して送ってほしいとお願いされたが、悲しいことに4年の前期の様子を収めた写真というのは一つもない。これも全部コロナのせいだ。もうこの際自撮り写真でも撮ってやろうかと考えたが少し冷静になった結果やめておいた。このように非常にさみしい私生活を過ごしていたのである。

ふと気づくともう4年の後期に差し掛かろうとしている。このペースで行くとあっという間に月日が過ぎ去り、すぐに本物の歯科医になろうという日がくるのではないかという気持ちになっている。0.5の期待と9.5の不安を抱えながらその日まで頑張っていきたいと思う。

歯学部生の今

歯学科4年 門倉朱音

入学当初は長いと思っていた6年間の学生生活も、気付けばもう4年生。学生生活の半分以上の時間が経っていました。今年度は新型コロナウイルスの影響によるカリキュラムの変更もありましたが、臨床科目の学習と実習に追われている毎日です。手一杯で辛いと感じることが多いですが、その中でも前向きに学習し、歯学の面白さを感じながら充実した日々を過ごしています。具体的に私の4月からの学生生活について紹介していきます。

新型コロナウイルスの影響により、4月始めの授業の開始が延期されました。春休みが延長されたものの、外出自粛の為、ほとんどを家の中で過ごしていました。この期間、中高の友人とオンライン飲み会で近況報告をしたり、挑戦してみたかった中国語の勉強したりと、時間のある時だからこそできることに取り組みました。

4月末からはオンラインでの講義が開始され、Zoomでのオンライン授業や配布された資料を読んで学習を進めました。約3か月間受講してみて、私はオンライン講義を率直によいと思いました。Zoomでの講義は講義室でのものと変わらず学習できました。ビデオを視聴する講義では、聞き逃した部分や分からなかった部分は何度も見返すことができ、大学の講義室で受講するのとはまた違った良さを感じました。さらに、朝の準備や通学時間がなくなり、休憩時間も仮眠を取ったりと時間を有効に活用でき、隙間時間で授業のレポートや復習などに取り組みました。一方で、疑問点や提出物の期限など1人だからこそ不安に思う時も多々ありました。1人で勉強していると、このままで大丈夫なのか不安になったり、考え方に偏りが生じてしまうため、大学に集まってみんな

勉強することの重要性に改めて気づきました。

6月からは感染症対策のもと、週2回の実習が開始されました。また、PBLもカリキュラムが変更になり週2回のペースでオンラインで行われました。実習では全部床義歯の製作を行っています。3年生の後期で行った歯冠修復学実習以来の久々の実習に不安でしたが、実習書とビデオを視聴し予習を行い、取り組んでいます。週2回のうち1回は1から5限までフルで実習を行うことに加えて、感染症対策でフェイスシールドを着用しなければならず、気温が上がっていくにつれてとにかく体力勝負でした。PBLではZoomを用いてグループディスカッション、全体発表を行いました。最初は画面越しでのディスカッションに戸惑いもありましたが、ファシリテーターの先生にご指導をいただき、有意義な討論が行えたのではないかと思います。

前期の講義や実習を経て、2、3年生の時に学習した基礎科目の重要性を感じました。今までなんとなく学習していた基礎科目の内容が、臨床科目を学んでいる今になり知識が体系付けられ、少しずつ教科書の文章を臨床でのイメージにつながり、歯学の面白さを感じるようになりました。また、実習を通して、今までいくら教科書を読んでも分からなかった部分が理解できるようになったり、実習時の作業や技術は上手いかず手探りの状況の中で、実習時のコツや製作物の着眼点を自分なりに学ぶことができました。4年生の後期は前期よりもさらに実習科目が増え、忙しく精神的にも辛い時期になると思います。できないことに落ち込むのではなく、その中で少しでも多くの知識を得られるように、努力していきたいと思いません。

歯学部生の今

歯学科5年 伊藤多市

こんにちは。歯学科5年の伊藤多市と申します。

今この原稿を書かせていただいているのは夏休み真っ只中、8月中旬です。

本来なら4月からスタートする予定だった授業が、新型コロナウイルスの影響で6月中旬のスタートにずれ、実感的には2、3ヶ月程度といったところなのですが、5年生になりもう5ヶ月も経ったのかと少し驚いています。

登校可能になるまでの約2ヶ月間は、週に数回のオンライン授業と課された課題をこなす日々、春休みが延長されたような感覚でした。外にも自由に出ることができない状況下でのいわゆる「おうち時間」、皆さんはどのように過ごされたでしょうか。こんなにも長い「おうち時間」は今後の人生でも経験できないものと考え、もう少し有意義な時間の使い方はなかったのかと、少しばかり後悔の気持ちもあります。

そしてほとんどの人が初めての経験であったであろうオンライン授業も、担当教科の先生方の御尽力により、大きなトラブルもなく受講することができました。ありがとうございました。

迎えた6月中旬、やっと実習が始まりました。先輩方が経験されてきた実習量を、短縮された期間でこなさなければならないのではないかと不安もありましたが、今のところ順調に実習を進めることができている。5年生前期で行われる主な実習としては、総合模型実習、ポリクリです。総合模型実習は様々な症状を持つ顎模型に対し、自分で治療計画を考え、それを実践する実習です。4年生までに行った実習全ての総まとめと言えるのですが、学生それぞれ治療手順が異なるため、

隣の人と同じ真似事をするなどということではできません。実際にその患者さんの担当医になったような気持ちで実習に臨むことが要求されます。

ポリクリではグループごとに各科をローテーションし、実習を行います。実際に人の口腔内で器具を扱うことは初めてだったので、相互実習とはいえ戸惑いました。友達の顔を印象材まみれにしたり、無理に口角を引っ張り痛い思いをさせることもあります。でもそこはお互い様、相互実習にはお互い広い心で臨むことが重要だと感じました。新型コロナウイルスの影響で制限のあるポリクリにはなりましたが、臨床実習に上がる前に1つでも多くの知識をこの実習で学びたいと思います。

そして前期のビッグイベントとして忘れてはならないのがCBTとOSCEです。OSCEは9月末ですが、先日CBTを終えました。クラス全体としても良い結果だったようです。ひと段落、といった感じですがすぐ先のOSCE、そして最終目標である国家試験合格へ向けて、クラス全員で協力し合い、今後の実習も乗り切っていきたいと思っています。



5年生になって

歯学科5年 早川里佳

あっという間に5年生になり、解剖実習や各科の基礎実習を頑張っていたのもついでこの間のことのような気がしています。今年度は新型コロナウイルスの影響により異例なことばかりで、部活動は停止、大会やイベントは中止、アルバイトはシフトゼロと、これまでの日常が全て奪われてしまいました。この原稿を書かせていただいている今は夏休みですが、感染者数は増加の一途をたどっており、暑くてもマスクが必須で、気兼ねなく出掛けたり飲んだりというようなことはまだ出来なそうです。「歯学部生の今」というテーマではありますが、前述のとおり様々なイベントが中止となってしまい他に書くことがありませんので、真面目に勉強の話だけにさせていただきますと思います。

まず講義が始めの2か月にオンライン等で行われました。5年生の講義はそこまで多くなかったので、空いた時間を使ってCBTの勉強をしたりしていました。今年度からCBTの実施時期は7月下旬に早まり、本来ならば講義や実習と並行しての勉強となる予定でしたが、この状況でしたので、CBTに集中して勉強することが出来ました。友人が、オンラインで話しながら一緒に勉強しようと声を掛けてくれて、そのおかげで自粛期間中も規則正しい生活で勉強を続けることが出来たと思っています。

実習は6月半ばから始まりました。5年生の実習は総合模型実習と臨床予備実習（ポリクリ）の2つです。それぞれ週2日で、水曜日以外実習というスケジュールで慌ただしく毎日が過ぎていきました。総合模型実習は、様々な疾患が再現された病態模型を用い、自分で治療計画を考え、それ

をもとに実習を進めていくものです。自分で立てた計画も、実習を進めていくうちにこうした方がよかった、ああした方がよかったと、考えさせられることばかりです。この実習も残り数回となっておりますが、何とかして終わらせたいと思います。ポリクリは、班ごとに各科を回ってそれぞれで実習を行います。今年度は例年よりも内容が縮小され、OSCEにつながる部分を中心に行われています。これまでの実習では全て模型に対してでしたが、ポリクリでは科によって相互実習も行われます。患者さんへの配慮を忘れない、清潔域・不潔域の区別を確実にするなど、模型実習の時も気を付けるのはもちろんですが、人に対してはそれ以上に気を付けなければならず、毎度緊張感を持って取り組んでいます。

このまま順調にいけば、10月からは臨床実習が始まります。まずはOSCEに向けて勉強し、臨床実習ではこれまで培った知識・技術が活かされるよう、初心を忘れずに日々精進したいと思います。



歯学部生の今

歯学科6年 青木 翔太郎

現在私たち6年は新潟大学病院で臨床実習を行っています。5年生までは講義や模型実習等で勉強をしてきましたが、臨床実習では日々患者さんからたくさんのお話を聞いています。患者さんの治療方針を考える際に実際に患者さんがどう思うか、どのような治療を希望しているかなどをお話することで、その患者さんの性格や生活習慣などより深く知ることができます。このように患者さんの生活背景も踏まえて口腔内全体の経過を追うことができるのはとても良い機会であり、その点で臨床実習は非常にやりがいを感じます。その分やるべきこともたくさんあり、1日が過ぎていくのがとても速く感じます。また今年は新型コロナウイルスの影響により例年のように実習を進めることができていません。診療制限等がありしばらく患者さんにお会いすることができず心配になったこともあります。このように大変なこともたくさんありますが、恵まれた環境で臨床実習を行うことができ、充実した毎日を送っています。また係の仕事や治療の相談を同級生と行う中で、6年目ではありますが絆も深まったように感じます。

一方で臨床実習中に常に頭に残っているのは歯科医師国家試験の存在です。自分が今年度の国家試験に合格できるかという不安と日々戦いながら実習を行っています。勉強をしなければならないことは理解していますが、毎日の実習やレポートに追われているというのが正直なところです。そのようなときに精神的な支えになるのが同級生の

存在です。実習の休み時間に何人かで集まり、それぞれのわからない箇所を質問しあうことで、お互いの進展状況を確認する良い機会となっています。6年目にして、同級生の存在がとても大きいことを実感しています。またこの時期になると進路の話が多くなり、病院見学で欠席する人や説明会に参加する人が何人か見受けられるようになりました。卒後のことは考えてはいましたが、いっきに現実味を帯びたように感じます。6年間ともに過ごしてきた同級生と離れるのはとても寂しいですが、それぞれの進路で活躍していくのを楽しみにしています。

臨床実習も残すところ2か月となりました。臨床実習や国家試験、卒後の進路についてと、忙しい日々を過ごしていますが大学生活の最後の1年を悔いを残さないように慢心せずに過ごしていきたいと思います。そのために1日1日を無駄にせず大切にしようと思いました。



歯学部生の今

歯学科6年 齋藤 瑠 郁

そういえば私たちもう6年生だね、と4月半ばにやっと気付くという感じで、あまり実感なく、最終学年になっていました。臨床実習期間もあと少しとなった今回、このページを執筆する2度目の機会をいただきましたので、1年間を振り返ろうと思います。

臨床実習の始まり、当院式の日、真っ直ぐな姿勢と真剣な顔を保って出席しましたが、1年間やっていけるかという不安と、初めて患者さんを担当することへの楽しみとで、内心ではまったく落ち着けなかったことを覚えています。診療の合間にひたすら引継資料を作成する初めの1ヶ月で、早くも臨床実習の多忙さを思い知ったこと、基本器具にさえ不慣れで、診療の全ステップに今の倍以上の時間を使っていたこと、カルテの開き方が覚えられなかったこと、他にもいろいろなことが懐かしいです。今年は診療制限期間もあり、例年以上に、現時点でもまだまだクラブリや義歯治療の真っ最中という人が多いです。

COVID-19の影響も含め、不安なことや大変なことも多くあった一方で、充実した毎日を過ごすことができています。臨床実習では、それぞれが12人ほどの患者さんを担当しています。私たちが診療を行うためには、レポートを作成して予習し、事前指導を受けることが必要です。診療後にはディスカッションやポートフォリオ作成で診療の反省を行います。専門科での診療見学も行っています。これらのことを通して、模型での基礎実習では理解や実践が不十分であったこと、つまり、患者さんへの態度や説明、「一口腔単位の治療」の重要性、そのための治療法の選択、技術など、多くを経験し学んでいます。そして、その経験や学びは、私たちが温かく受け入れてくださる患者さんと、丁寧に指導してくださる先生方の支

えの上にあることを常に感じています。

また、学生技工室で51期のみなどと過ごす時間も、充実した毎日に欠かせません。技工室は私たちの成長の場です。治療方針や治療計画を相談し合ったり、国家試験勉強をしたり、技工物を製作したりします。37人それぞれに得意分野があり、弱点を補い合えています。私の場合は、2年前の執筆の頃には苦手で辛かった技工操作も、周りのアドバイスを受けて、楽しく感じるようになりました。技工室は私たちが1日の大半を過ごす場でもあります。最近、思いもよらず、勉強の合間のルービックキューブやオセロが流行っています。

多忙だけど楽しい、と毎日が充実しているからこそ、臨床実習期間が残りわずか、その先には国家試験が待っていること、卒業しそれぞれが別の道に進むことに、不安や寂しさがあります。このまま全員で研修できればいいのに、とも考えてしまいます。しかし、将来のことを真剣に考えている51期のみなどとだからこそ、違った目標を持っていても一緒に努力できるのだと思っています。今後も全員で最大限努力し、立派な歯科医師になりたいです。



二年生になって

口腔生命福祉学科2年 島村 陽南子

今年度は新型コロナウイルスの影響のために、予定よりも2週間ほど遅れて新学期がスタートしました。感染予防のため講義も基本的にはzoomを用いた非対面形式で行われ、通常通りとはいかない現状がありました。その中で専門科目も始まり、PBLなどの新しい学習形式も入り始め、戸惑うことが多い日々を送っています。

二年生になってからPBLという学習形式が基本となっています。科目によっては、それを補うような形として講義があるというように感じます。PBL学習は、学生が主体となって学習し、問題を解決することが求められます。具体的には、グループに分かれて配布されたシナリオから事実を読み取り、疑問を抽出し、仮説を立て、疑問と仮説を基に学習課題を設定し、各自で学習内容を調べて、それを基にグループ討論（今年度は、メーリングリストやzoomを用いて行われています。）し、疑問を解決します。グループ討議では、調べて得た知識を基に自分の意見を述べます。その際には、信頼できるリソースから得た情報を基に、分かりやすく順序だった説明することが大切だと感じました。そのために学習課題の調査では、情報集めにとどまらないように、疑問の解決

を目指しながら進めようと思うようになりました。

早期臨床実習は例年では、歯科のある病院や介護老人福祉施設などにおいて見学実習が行われていたようですが、今年度は先生方から各施設について説明を受ける形となりました。先生方の説明によく耳を傾け、実際の現場を想像しようと励みました。歯科衛生士概論では、実際に歯科衛生士や社会福祉士として活躍されている方が大学で非常勤講師として講義をしてくださいます。今年度は直接お話を聞くことは出来ませんでした。資料を用意していただく形などで学ぶことが出来ました。歯科診療所の歯科衛生士の業務の回では、zoomを用いて歯科診療所から授業をしていただきました。歯科診療所の様子を知ることが出来て、非対面形式で行われていた利点を感じました。

非対面形式では友人の学習方法や態度が見えないので、自分の学習への意識や態度がより重要になっているような気がします。私は、テストを目前にして今までの学習への態度や生活習慣を後悔することが多々あります。強い気持ちをもって、日々生活していきたいと思いました。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科3年 谷川友菜

「え、もう夏休み？もうすぐ8月？」「3年次になってから早すぎるよね。」夏休みに入る前の友人との会話です。今年度大学に行くことが少なかったために月日が過ぎるのが早く感じました。例年通りであれば4月の中旬に3年次ガイダンスがあり、2週目から授業・実習が始まります。しかし今年度、授業が始まったのは4月の最終週、実習が始まったのは6月中旬でした。新型コロナウイルスの蔓延は私たち大学生にも大きく影響し、授業の形態が非対面のものとなったり、実習が中止になったりするなど今まで経験したことのないものになりました。初めてのZOOMを使っただけの授業、実習ができない状況にとっても不安を感じながら3年次の授業が始まりました。

特に授業の形が大きく変わったと感じたのは幼稚園での歯科保健指導に向けた実習です。例年は6月上旬の幼稚園での実習に向け、学生同士で何度も内容を考え直し、練習を繰り返しながら授業が進み、実習当日は子どもたちと向き合い、子どもたちの反応や理解度を確認しながら歯科保健指導を行うものでした。しかし今年度は幼稚園での実習を行うことができなくなり、家の中で個人で歯科保健指導の内容を考え、最後に子どもたちが目の前にいることを想像して歯科保健指導を行いました。その様子を個人で動画を撮影し、ZOOMを用いて学生同士で意見を出し合うものになりました。私自身子どもたちと実際に触れ合うことができるこの実習を昨年度から楽しみにしていたため、中止となりとても残念でしたが、触れ合うことができなくてもそれぞれが考えた指導案を見て、私には思いつかない歯科保健指導の内容や子どもたちへの伝え方を学ぶことができました。

3年次となり福祉の授業が本格的に始まり、福祉の歴史や社会保障、生活保護、児童家庭福祉の制度などをZOOMでの講義やPBLを通して学びました。学ぶ範囲がとても広く内容が複雑であり、どう勉強していくのがよいのか試行錯誤している状態です。その制度がどうしてできたのか、どのような経過があり、どのような役割があるのか、制度の目的・対象・内容などを一つ一つ整理していきながら取り組んでいきたいと思っています。また、GDPが戦後最悪になるなど新型コロナウイルスの影響があり、安定した収入が得られない、学校に行く時間が少なく十分に勉強できない、社会との関わりが減っているなど、働く人、子ども、高齢者、社会の多くの人にそれぞれの困難が出てきていると思います。そして社会福祉士がかかわる制度が大きく変わっていくと思います。だからこそ新聞やニュースを見て現在の社会を理解し、これからどうなるかわからない状況の中で広い視野を持って考えていくことが大切だと感じています。

本来であれば、私は今年の夏にインターンシップに参加し、その経験から卒業後の進路について具体的に考えていこうと思っていました。しかし、それが中止となり、3年次で体験したいことが十分にできません。これからの施設見学や実習が十分に行えるかもわかりません。そのような状況ですが新型コロナウイルスの影響がある今だからこそ、この時間を将来のことのための情報収集の時間に活用できるのではないかと考えています。インターネットを使って個人で情報収集をすることはもちろんですが、先生方にお話をお伺いするなど自分から動いて、できることを見つけていきたいと思っています。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科4年 中村 夢衣

初めまして。口腔生命福祉学科4年中村です。「歯学部生の今」というタイトルのもと、日々の学生生活について書かせていただきます。時の流れは早いもので、あっという間に最終学年となり、来年度から社会人となることに日々焦りを感じています。

本来であれば、4月から病院における臨床実習や様々な施設等における福祉実習などが始まる予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で実習ができず、病院における実習は6月末よりようやく開始しました。実習初日はやはりとても緊張しました。うまくできるのかと不安でヒヤヒヤすることが多いですが、先生方や歯科衛生士の方々からご指導いただき、時には励ましの言葉をいただき、達成感を感じられることもあります。新型コロナウイルスの影響で日常生活が一変し、良くないイメージを抱きがちではありますが、こういった事態だからこそ、感染予防により注意しようと気を引き締めて実習しています。病院実習は月曜日から木曜日で私たちにとって木曜日は「華木」なので、木曜日の放課後には皆とお酒を飲みながら1週間の出来事や将来のことについて語り合いたいところではありますが、今のご時世それができないのがなかなかつらくもあります。

また、病院における臨床実習以外に社会福祉現場実習として、1か月間それぞれ選択した社会福祉施設において実習を行うのですが、これに関しても実際の現場において実習することが困難であり、代替実習を行うこととなりました。私の場合、現場にて実習できず、残念ではありましたが、

代替実習も新たな試みであり、これもまたとても新鮮な経験をすることができました。担当してくださった先生と毎週にオンラインまたはソーシャルディスタンスを考慮した面談を行うことで、新たに知ることが多く大変勉強になりました。

いつの間にか最終学年の1年も折り返しを迎えようとしています。実習は病院や社会福祉施設それぞれにおける実習を含めて11月いっぱいまで終了となります。残り少ない日数ですが、日々多くを学びたいと考えています。実習が終わるといよいよ国家試験の対策が本格的に始まります。歯科衛生士と社会福祉士の両方の国家試験を受験するのでどちらも両立しながら、ダブルライセンス取得を目指して努力したいです。しかしながら、ただ、勉強や実習を頑張った1年にするのめよいのですが、学生最後の1年でもありますので、なかなか難しいことではありますが、クラスの皆とたくさん思い出を作り、楽しかったと言える1年にしたいです。



新型コロナウイルスによる部活動紹介の変化

新潟大学歯学部サッカー部 歯学科4年主務 成瀬道春

現在、歯学部サッカー部では、プレイヤー13名、マネージャー6名の計19名ですが、新型コロナウイルス（COVID-19）の影響により、活動は自粛しております（8月23日現在）。プレイヤー13名とサッカーをする上でとてもギリギリな状況で新入部員がとても大事になってきます。去年までの勧誘では、新1年生を集めた場が用意され、そこでユニフォームや練習着を着て、大きなスクリーンを使って動画で部活動紹介を行い、その後実際に一人ひとりにチラシを配りながら、部活動の良いところを紹介したり、質問を聞いたりして話していました。また、サッカー部に少しでも興味がある方には、練習を体験してもらって、その後の部飯も誘うことを繰り返して、勧誘を進めてきました。しかし、現在では、活動を自粛していることで練習を体験してもらえないことや紹介の場がなくなってしまい、部活動紹介の動画を見てもらうことや実際に会って誘うことや質問を聞くことができなくなり、勧誘することが大変難しくなっています。

そのため、私たちは実際に会うことはせずに、様々な方法で勧誘を行っています。まず初めに、SNSによる部活動紹介をしてきました。SNSでは、部活動を行っている曜日や時間帯、大会での成績や楽しいイベントなどの写真投稿に加えて、一人ずつ部員の紹介を行うことで、部活動の基本的な情報から楽しいイベント、チームの現状を知ってもらっています。二つ目として、Youtubeによる部活動紹介の動画を投稿させていただきました。歯学部学務係の方々に新1年生

に向けた限定公開で各部活動の紹介ムービーを作る企画をしてもらったので、サッカー部も紹介動画を作り、投稿させて頂きました。動画には、部員数や日時などの基本的事項からオールデンタルや北医体、浜コンなどのイベント紹介を画像と音楽を添えた形で作りました。三つ目として、コスモツアーリストさんが企画した部活動のチラシ配りをお願いしました。新1年生は、2年生以上の学年とキャンパスが異なるため、直接自分たちでは配ることができません。そのため、学校近くのコスモツアーリストさんをお願いして、自分たちで作ったチラシを配って頂きました。そして、最後に興味があると連絡してもらった新入生とZoomを使い、オンライン新歓を行いました。そこでは、部活についての詳しい情報や雰囲気を教えること、部活の質問だけでなく、大学生活の様々な質問にも答えるなどして、1年生とお話をさせていただきました。

このように様々なアプローチによって、新1年生を勧誘してきました。しかし、まだこれらの情報が届いていない生徒やサッカー部に興味がある方もいると思うので、SNSなどを利用して、これからも情報を流していければと思っています。また、私たちの部活動では、大学の危機管理センターに新型コロナウイルス対策案を提出し、許可を頂いたので9月から練習が再開されます。接触プレーなどが禁止され、パス練習が主になっていますが、その練習に参加してもらって、体験を通して入部してもらえたらと思っています。

は～もに～プロジェクト

歯学科5年 坂田政貴

はじめまして、「は～もに～プロジェクト」の坂田政貴です。

「は～もに～なんて部活、初めて聞いたよ。」という方も多くおられると思いますので、ご紹介させていただきます。

☆は～もに～プロジェクトとは

は～もに～プロジェクトとは歯科保健活動を効果的、効率的に推進・展開していくための事業です。

地域歯科保健事業であり、「新潟県歯科医師会」「新潟市歯科医師会」「新潟大学歯学部」「NPO法人まちづくり学校」などが協働し、歯科医師と地域をつなぐ事業を展開しています。

地域の方々との活動を通し、以下に挙げます歯科保健に対する意識向上を目指しています。

- ◆『成人歯科保健に対する認識を広める』
- ◆『歯科受診の向上』

☆主な活動内容

は～もに～では、歯科保健の普及のために市民と歯科関係者での意見交換会、新潟食の陣での街頭アンケート、専門学校との連携、遊びを通して歯や口の健康について学んでもらうことを狙いとしたカルタの製作などを行っています。そして僕たち学生は学校との連携プロジェクトを行っています。昨年度では新潟市内の小学校の文化祭に参加させていただき、子供たちやその保護者の方々を対象に、歯科の体験コーナーや歯科相談を実施しました。

歯科のブースでは予防歯科の先生方や、InDeVOさんと協力し、歯磨きの強さや、咀嚼力、舌の機能のチェックなどを行いました。また子供たちに本物の白衣を着てもらおうなどの体験コーナーなどもあり大盛況でした。

また近年は部員が少なく、あまり出来ていませんが、学校連携プロジェクトだけではなく、幅広い年齢層の方に歯科に対する興味や関心をもっていただくために演劇や、自作でのCDを出すなど多方面から活動を行っております。

これらの活動を通し、健康に対する取り組みが認められ「新潟県 元気にいがた健康アワード」において準グランプリを受賞した経歴もあります。

☆さいごに

学生は～もに～では、現在一緒に活動して下さる方を募集しております。活動内容として、子供たちやその保護者の方と接することが多く、人とコミュニケーションを取る事が好きな方大歓迎です。

予防歯科の先生方の協力があるため、初めてであっても問題ありません。学部内の限られた空間だけではなく、地域の方と一緒に協力し合いながら活動することは、とても楽しく貴重な経験になること間違いなしです。

少しでも興味が湧いた方は僕や予防歯科学分野の葎原先生に連絡していただければと思います。

今回は「は～もに～ぷろじえくと」を紹介させていただき機会をいただきまして感謝いたします。一人でも多くの方の目に留まり「は～もに～の」輪が広がっていけば幸いです。



「いまを生きる carpe diem」という人生観を携えて

予防歯科学分野 西 真紀子



2020年1月1日付けで、予防歯科学分野の助教を拝命致しました西真紀子（にし まきこ）と申します。歯科医師になってから24年間の大半をヨーロッパで過ごし、2018年9月にアイル

ランドでPhDを取得して帰国しました。PhD論文のタイトルは“Personalised dental education for caries risk reduction in an adult population in the Republic of Ireland”で、<https://cora.ucc.ie/handle/10468/7001>（右下のQRコード）からダウンロードしていただけます。

海外でPhDを取るというのは日本の歯科医師の中では珍しいと思いますが、私はその他にMaster of Dental Public Healthも同じ大学で取得し、もっと遡ると歯科医師になる前に、神戸大学で教育学士と教員免許状も取得していて、さらに大学に勤務しながらNPO法人「最先端のむし歯・歯周病予防を要求する会」（PSAP）の理事長や㈱モリタのアドバイザーも兼業するという、変わった経歴と経験を持って新潟大学にやってきました。そのためか、この「歯学部ニュース」に原稿を依頼していただきました。皆様に退屈にならない程度に、あまり他で書いてこなかったことを綴っていこうと思います。

私がこのような特別な歯科医師人生を歩んできたのは、10代の終わりから20代にかけて両親や友人たちを亡くしたことが理由になっているかもしれません。人はこんなにも簡単に亡くなってしまうと、若くして毎日が死と隣り合わせのような人生観を持ちました。人の命は儚いのだから、後悔

しないように、好きな人にはすぐに会いに行こう、感謝の気持ちはその場で口に出そう、そして、思ったことは実行しよう、義理や面子で嫌なことに時間を費やすほど人生は長くないと非常に強く思うようになりました。

教育学部で受けた青年心理学の授業で、青年期は特に思い込みが激しくなると習いましたが、その自覚がありながら、やっぱり思い込みに従わざるを得ない有り余るエネルギーのおかげでしょうか。私は、まず、19歳の時に亡くした母が「本当は歯医者にしたかった」という主治医に言っていた何気ない一言に拘って、大阪大学歯学部に入るといふ突拍子もない選択肢を取りました。この世で一番自分の性格、適正、興味を理解し、将来を文字通り親身に考えてくれていたのは母親で、地上にいる誰のアドバイスにも優っていると信じて疑いませんでした。

案の定、そんな突飛な決心に周囲の人々は驚いたり呆れたり、父からは猛反対を受けましたが、その頃、偶然に神谷美恵子先生の著書「こころの旅」と出会い、私の孤独な決心を支えてくれました。彼女は文学から転向した精神科医で、戦争中、それも女性でそのような人生を送った方が先人にいらっしまったということは心強かったです。そして、彼女の著作集から日記や書簡を読み、反対を押し切って転向することを決めた堅い意志と使命感に感銘を受けながら、自分の決心と重ねました。

こんな感じで歯学部に入りましたので、人一倍モチベーションが高く、授業はいつも一番前の席に座って知識を貪欲に吸収しまし



た。私より若い人たちがほとんどだったクラスの中で、「いまを生きる carpe diem」というような人生観を感じる人がいて、その同級生と同じ歯科保存学講座に入局しました。後に知ったのは、彼もお父様を亡くされていたとのことで、その点で何か心情的に通ずるものがあったのかもしれませんが。私が出張先で理想と現実のギャップに打ちのめされ、「発展途上国に行こうと思う」という話を真面目にできる唯一の友人でした。その友人がある日突然亡くなってしまいました。その一年前にも仲の良い同級生と父が亡くなっていて、これでもか、これでもかと悲しみに襲われる一年間でした。私はもう躊躇することなく、当時、阪大のある教授が率いておられたネパールへのボランティア活動に参加を申し出ました。

ネパールはその時、世界の最貧国のうちの一つで、夜、貧弱なカトマンズ空港に降り立つと、大勢のストリートチルドレンがワーッと群がってきました。日本の十円玉でも彼らには高価なのですが、一人にあげるとその場がパニックになるので、私たち一団全員が無視して送迎バスに乗り込みました。車窓の外では、私たちに無視されたストリートチルドレンが楽しそうにジャンプして踊って見せてくれていました。お金を貰おうが貰うまいが、「いまを生きる」天才なのです。ボランティア活動と言いつつ、私の方が彼らの逞しさを学び、健気さに勇気づけられました。孤児院の子どもたちの集団歯科検診をした時には、何かの皮膚病を呈している子もいました。AIDSかもしれないから気をつけるように言われました。もしかし



写真1 ネパールの無歯科医村での集団歯科検診

たら私よりもずっと先に死んでしまうかもしれない孤児のために、私にできることとして、少なくとも口腔保健だけは守ってあげたいと思いました(写真1)。

その頃、カリオロジーを臨床に応用して素晴らしい成果を上げておられた山形県酒田市の熊谷崇先生のことを知り、そのような知識を発展途上国の子どもたちに提供したいと考えました。まだタービンがない抜歯の時代から修復の時代を飛び越えて予防の時代へ、そういうことを考えている歯科医師が世界にいるのなら、私も仲間に入れてほしいと羨望しました。

熊谷先生は大病で生死を彷徨われたご経験があります。集中治療室で、もしも生還できたら、いろいろなしがらみを捨て、やるべきことをやろうと決心されたという記事を読み、非常に共鳴しました。前述の友人もそうですが、そういう人生観を持つ人に自然と引き寄せられるようになっているのかもしれませんが。そうだとしたら、歯科医師人生の始めに熊谷先生のことを知らせてくれた幸運に、本当に感謝したいです。

1999年に熊谷先生がスウェーデン・マルメ大学(写真2)から名誉博士号を授与され、熊谷先生



写真2 スウェーデンのマルメ大学歯学部

のおかげで私はその大学のカリオロジー講座に留学させていただく夢が叶いました。主任教授は故ダグラス・ブラッター先生で、熊谷先生の臨床モデルの科学的裏付けを提供するブレンでした。そして、WHO（世界保健機関）の顧問として、様々な国の予防歯科プログラムを手がけられ、日本での講演や、ディスカッションの座長も素晴らしく、最も憧れていた先生でしたので、そのブラッター先生に師事できることが決まった日は、嬉しくて一晩眠れませんでした。

ブラッター先生は息子さんがIT専門家で、早くも1995年にThe WHO Oral Health Country/Area Profile Programme (CAPP) というサイトを大学に立ち上げられていました。私はたまたま日本で、ネパールのことを調べている時にCAPPを見つけ、新潟大学に歯周病のデータを集めた姉妹サイトがあるということも知りました。一方、齲蝕のデータを担当しているマルメ大学のCAPPでは、日本の砂糖の消費量と齲蝕経験歯数の関連性を示すグラフまであり、感動しました。それは、新潟大学歯学部予防歯科講座の当時の宮崎秀夫教授の論文（Eur. J. Oral Sci., (4 (Pt 2)):452-458）からの引用でした。

私は、CAPPのために日本語や中国語で書かれた表の意味を説明したり、ブラッター先生が2000年に提唱されたThe Significant Caries Indexについてのマニュアルを作ったり、エクセルで計算プログラムを作ったりしました。ブラッター先生は、私に会う度に、力強く、“You are fantastic!” と言ってくれました。カリオロ



写真3 スウェーデンの友人宅のキッチン

ジーの世界を牽引する偉人で、賢者で、人格者、そのような人から毎日のように褒められる、これほど嬉しいことはありません。私は今でも先生のこの一言を求めて仕事をしている気がします。

それから、スウェーデンで暮らし始めた時に気がついたのですが（写真3）、日本から9,000kmも離れていると、亡くなった両親も友人たちもみんな日本で生きているような錯覚をして、いつも抱えていた悲しい寂しい気持ちがすっかり晴れ上がったのです。このことは、後にアイルランドに長く暮らす要因の一つでもありました。おそらく、私は老後もこうやって、愛する故人たちを心の中で生かすために海外に出ているのでしょう。

スウェーデン留学の後は、熊谷先生の日吉歯科診療所に勤務させてもらいながら、大型連休にはスウェーデンを訪れ、2005年にはスウェーデンに頻繁に行くために、マルメに近いWHO協力センターとして、アイルランドのユニバーシティ・カレッジ・コーク（写真4）に留学しました。というのも、ブラッター先生はその頃、末期のがんでいらしたので、2、3時間で飛んでいける距離にいたかったのです。



写真4 アイルランドのユニバーシティ・カレッジ・コークの歯学部附属病院

2006年にブラッター先生も亡くなってしまい、私の歯科医療に対する情熱の火もしばらく消えてしまいました。でも、アイルランドの友人がどことなくブラッター先生に似ていて、この土地がこの世で一番ブラッター先生を感じられるところのような気がして、13年間も居着いてしま

いました。二人とも北欧バイキングの末裔であるらしく、遺伝子に共通項があるのかなあと感じたりします。13年間、ゆったりと流れる時間と広々とした空間をもらって（写真5）、純粋に歯科医療の本質と未来を考えながら、日本から依頼される執筆、翻訳、講演などに勤しむという贅沢な40代を過ごしました（写真6）。その間、ありがたいことに4回に渡って、熊谷崇先生が主宰するOral Physicianセミナーのマルメ大学研修に通訊兼コーディネーターとして同行させてもらい、多くの有意義な情報をいただきました（写真7）。スウェーデンの先生方は本当に知の宝庫で、論理的でいらして、カリオロジー（caries + logics）が発展したのも頷けます。そして、研修に参加された日本人の歯科医師、歯科衛生士の真面目さにも心打たれました。

去年、帰国を機に2010年から続くPSAPの活動を本格化して、夏は涼しいヨーロッパで、冬は晴



写真5 週末によく訪れたアイルランドの田舎の牧場



写真6 度々呼んでいただいた日本での講演の様子



写真7 Oral Physicianセミナーの研修を行ったマルメ大学歯学部大講堂

れの多い大阪で仕事をするという素敵な渡り鳥生活を夢に描いていた矢先、寒い盛りに新潟にやって参りました。マルメ大学と提携のある新潟大学でカリエスマネジメントモデルを作ること、CAPPのお手伝いをするということ命をいただき、喜んでお引き受けしたわけです。このご縁もブラッター先生に導かれているかのようです。COVID-19のおかげでどのみち羽を畳まなければならなかったため、この時期に合致したのも運命的です。

また、21年ぶりに日本の教育現場に戻るということで、私がマルメ大学で見た教育のように、学生さんたちの能力を最大限引き出せるような教育活動をしたと思います。さらに、一人でも多くの方を、学生満足度がスウェーデンで最も高いマルメ大学歯学部にご案内したいです。そして、私がスウェーデンやアイルランドを大好きになったように、新潟大学にいられた外国人留学生の皆様にも、日本を大好きになってもらえるようにホスピタリティを尽くしたいと思います。

私事の長い文章に最後までお付き合いいただき、どうもありがとうございました。このように独自の歯科医師人生を歩んで参りましたので、常識が抜けていることも多々あると思いますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いたします。末筆ではございますが、皆様のさらなるご活躍とご発展をお祈り申し上げます。

大学院へ行こう

う蝕学分野 永田 量子

拙い文章ですが現在、大学院へ進学しようか迷っている皆さんの参考になれば幸いです。

私は学生時代から漠然と大学院への進学を考えておりましたが、どこの大学、どんな分野へ行こうかとはあまり考えていませんでした。大体どのようなことをするのか、研究とはなんぞや、そもそもできるのか、なんとかなるものなのかな等等、本当に無知で無計画でした。

そんな中、新潟大学の研修医になり自分の極めたいと思える分野がはっきりしてきました。また、医局説明会を受けて自分の極めていきたい分野が一番近かった現在の医局に入局させてもらいました。

正直、大学院進学を決めてからはかなり不安でした。もともと出身校では無い為、どんな先生がいるのか、医局の雰囲気はどのようなものなのか全く知らなかったからです。しかし、医局の先生がたは優しくアシストしてくれて、すぐに医局に慣れることができました。また、専門分野だからこそある特殊な器具の使用法などもだんだんと覚えていきました。研究も初めはよくわからなくて戸惑いましたが、だんだんと形になって自分の力のみで対処していけるようになると楽しさも湧いてきました。

現在、私が行なっている研究は、ご存知の方もいるかと思いますが、ピロリ菌を扱ったものです。ピロリ菌は胃がんの原因というのはよく聞かかと思えます。歯医者とはピロリ菌になんのか関係があるのかと思えますよね。そのようなちょっとした疑問の答えが気になるような方は大学院生に向いているかもしれません。実はピロリ菌は口腔内にも存在している可能性があるのです。ピロリ菌の感染経路は未だははっきりしていないのですが、ピロリ菌だけではなくこういう研究をしていると

なんとなくそのものの性質がわかってきて、周りに注意を促したりできますね。

また、ご時世的にPCRという言葉が報道で聞いたりしますが、これもどんなものかわかりますし実際研究で使います。報道内容に対して突っ込みを入れることも容易いですよ。

さて早いもので現在、私はう蝕学分野の大学院4年生になりました。研究も大詰めで論文投稿に向けて気合いを入れ直さねばと思うところです。この4年間大学院でしか体験できないことがたくさんありました。学会での発表はもちろん、医学部との共同研究や、企業や留学生との交流、学生さんへの実習指導など、4年間の大学院生活は長いと最初は考えていましたが、あっという間でした。

今、大学院へ興味を持っている人がいれば、私はお勧めしたいと思います。研究なんか難しそうでも自分には敷居が高いと考えている人もいるかもしれません。最初は確かに戸惑うこともあるかもしれませんが、それは当たり前です。人生においてやったことないことですから。しかし、続けてみると案外形になっていくものです。それに、他では得ることのできない人とのつながりや、知識を得ることができますよ。

人生は経験です。



令和元年12月撮影

大学院へ行こう

歯周診断・再建学分野 松 岸 葵

大学院4年の松岸葵と申します。大学院生活も終わりに差し掛かったところで、「大学院へ行こう」の原稿依頼を頂きましたので、自分の経験を交えてお伝えさせていただきます。

大学院進学を考えたのは少し早く、6年生で臨床研修先を決める時だったでしょうか。大学院を経験した父の勧めもあり、博士号を取得し、臨床技術も身につけてから歯科医師として社会で働きたいと考えていました。また、様々な科で臨床実習を行っていく中で、患者さんを診て長くお付き合いしていく歯周病科に興味を持ちました。そこで、当院の臨床研修で半年歯周病科の先生にお世話になり、その後も大学院で歯周診断・再建学分野を選択し、今に至ります。

と言いつつも、この時点では大学院のお仕事、特に「研究」についてイメージがぼんやりとしていたように思います。博士号を得るために必要なことではあるものの、果たして4年もやっていけるのかという不安がありました。しかし結果的に大学院のお仕事は大きく自分を成長させてくれたと思います。

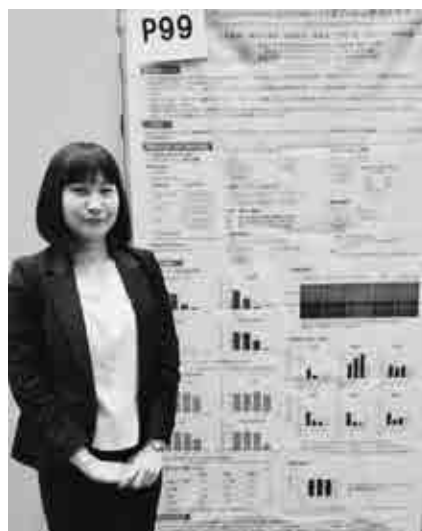
まず研究で理論的に考える力をトレーニングできます。もともと得意ではなかった分野ですが、自分の実験データを先生に説明し、理解が足りない部分を解説して頂くことで、少しずつ論理的思考ができるようになり始めました。すると臨床でも、「どうすればこのケースは良くなるか」など、習慣的に問題点と解決策を考え、さらに患者さんに分かりやすく説明ができるようになってきている、と実感しました。

また、並行して色々な仕事をできるようにもなったと思います。慣れてくると様々なプロジェクトを同時に担当させて頂きました。最初は毎日生きるのに必死でしたが、先生もそんな私の状態・進捗を見ながらアドバイスをして下さいまし

た。「クオリティを落とさず効率良く進めるにはどうしたら良いか？」と徐々に考えられるようになり、自分のキャパシティも少しずつ大きくなってきたように思います。

さらに大学院には沢山の先生、先輩方がいらっしゃるため色々な相談に乗って頂けますし、同期とは切磋琢磨することができます。最近では留学生の後輩ができました。最初は私のボキャブラリーが貧弱なあまり、コミュニケーションが難しかったのですが、英語力や教える力をつけることができました。教えることは難しいですが、何よりも自分の勉強になっていると感じます。

もちろん上手くいくことばかりではなく、実験で使う細菌の培養状態に振り回される、実験失敗する夢を見て夜中に起きるなどもありましたし、外の病院や開業医に行けば違う自分にもなれたのではないかと思います。ですが、自分にとって大学院は成長させてくれるとても良い場所でした。もし少しでも興味があれば、皆さんも大学院という選択肢はいかがでしょうか？進路決定は悩む所と思いますが、この話が皆さんの助けに少しでもなれば幸いです。



「大学院へ行こう」から「大学院にいます」

生体歯科補綴学 山本 悠

生体歯科補綴学分野大学院2年山本悠と申します。この度、大学院へ行こうというテーマで執筆させていただきます。ですが、現在、大学院生ですので、あえて「大学院にいます」もタイトルに付け加えました。

「親にできる治療をしているか」

私は、研修医で冠ブリッジ診療科に入局しました。入局の大きな理由となったのが、「親にできる治療をしているか」という言葉です。これは、私が歯学部5年生の時に、当分野教授の魚島先生が講義で話された言葉です。

講義室の、一番前の席で、前のめりに、講義に集中していた私は、「いいこと話しているな～」と生意気な感想と共に、臨床へ出ていないその時は、言葉の本質を理解できませんでした。(今もその本質を探究している最中ですし、ずっと探求すべきであるとも思います)

臨床実習で患者さんを治療する立場となり、少しその意味が分かってきました。そして、「親・家族・大切な人にしてあげられる・してあげた治療を学びたい」と考え、研修医で冠ブリッジ診療科へ入局し、もっと学びたいと考え、大学院へ進学しました。ですので、私の「大学院へ行こう」は親にできる治療を学びたい・その本質に近づきたい、というモチベーションのもとにあります。

大学院へ入学し、診療、研究、また同期、後輩、先輩、教員の先生方にも恵まれ、日々充実した日々を過ごしております。今年度は、コロナウイルス感染拡大により、外来縮小など、ある程度のまとまった時間を得ることが出来ました。これは、研究テーマを学ぶチャンスと考え、4月から英語論文を毎週1本読むことに決めました。ですが、どの論文を読むべきか、どのジャーナルがよ

いのか、誰が書いているのか、それに加えて、英単語が分からない、専門用語はもっとわからない、壁がたくさんありました。ただ、昔から、まずはやってみるとというのが、私のスタンスです。とりあえず、私の研究テーマに近いキーワードを検索して、読んでみるという生活を始めました。読んでいくうちに、例えばインプラント関連の論文であれば、「顎堤の骨吸収が進み、、、」や「咬合による機械的な、、、」など、毎回の流れが分かってきました。

というように、徐々に読めるようになってくると、(自分で始めておきながら)初めは苦と感じていた論文を読むことも、新たな学びを得られるという「わくわく」感が勝ってきました(もちろん今も良い意味で苦は感じますが)。次のステップはこの学びを、今行っている研究に生かすことです。

最後に、趣味の読書で熱中していることは、「古事記」を読むことです。もちろん、現代語訳です。研修医の半年を大阪で過ごし、その時に、初めて古事記を読みました。そして、仁徳天皇御陵、伊勢神宮、出雲大社、橿原神宮、大神神社、春日大社、京都御所、などなど様々な場所を訪れました。日本人のルーツ、アイデンティティが古事記には詰まっていて、何とも言えない感動があり、何回読んだか覚えていないほど読んでいます。ですが、全く飽きません。むしろ、もっと知りたいと感じ、今は、日本書紀、地元長野・善光寺の歴史書を読んで勉強しております。

大学院にいる今、診療、研究、趣味、学べることはたくさんありそうです。そして「大学院にいました」という時に、何を学んでいるか楽しみです。

学会受賞報告

文部科学省 若手科学者賞

令和2年度文部科学大臣表彰 若手科学者賞受賞報告

高度口腔機能教育研究センター 前川 知 樹

この度、令和2年度文部科学大臣表彰 若手科学者賞を受賞いたしましたのでご報告いたします。

文部科学大臣表彰若手科学者賞は、萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績をあげた40歳未満の若手研究者が対象となる賞で、本学では初の受賞となりました。

受賞業績名は「内因性抗炎症分子の再誘導による炎症性疾患治療法の基盤研究」です。学会賞等と異なるのは、対象者のこれまでの研究業績や表彰、メディア掲載等を総括した内容を評価されることです。したがって本受賞は、大学院生からこれまでの研究活動を支えてくださった全ての方々のおかげです。大変ありがとうございます。

受賞内容を簡潔にですが説明させていただければと思います。私は、2007年4月に新潟大学大学院医歯学総合研究科の歯周診断・再建学分野（当時：吉江 弘正 教授）大学院生となり、山崎 和久 教授のご指導のもと、歯周病と全身疾患の関連研究を行いました。当時は、山崎先生をはじめ多部田 康一 先生（現：歯周診断・再建学分野 教授）、土門 久哲 先生（現：微生物感染症学分野 准教授）より分子生物学の基礎から動物実験の方法、さらに研究とはなにかを熱心にご教示いただきました。学部学生時代から同期である高橋 直紀 先生（現：歯周診断・再建学分野講師）とは、夜中まで実験をしていた思い出があります。山崎先生、多部田先生の熱心なご指導のおかげもあり、大学

院を無事卒業したのち、日本学術振興会の海外特別研究員に採択されたことから、米国ペンシルベニア大学へ留学する機会を得ました。米国ペンシルベニア大学には、土門先生の留学先の元ボスでありますHajishengallis教授が着任されたばかりで、ラボのセットアップから参加することになりました。私はHajishengallis研究室で2012年から2015年までのおよそ4年の間、歯周炎の成り立ちから全身疾患との関わり、さらに細菌と炎症制御による歯周炎治療の実際と、トランスレーショナルリサーチを含めた治療法開発に関わりました。

当時は、歯周炎の原因として*Porphyromonas gingivalis*（以下Pg）が広く知られていましたが、私たちはPgが無菌マウスでは歯周病を誘導しないことを示し、Pgは常在菌（普段口の中にいる菌）のバランスを崩し、歯周病を誘導しているKeystone細菌という概念を確立しました。現行の歯周炎の治療方法は、細菌全体の数を減少させる広域スペクトルの抗生物質の使用または痛みを伴う機械的な細菌叢の除去による治療しかありません。さらに口腔内から全細菌を除去することは不可能に近いといえます。そこで、歯周炎の治療では、口腔細菌の環境を悪化させるPgのみを選択的に除去することで恒常性が維持された口腔環境を作り出す方法を考えました。Pgは免疫の一つである補体C5aを利用し、免疫系を攪乱させることで場の環境を悪化させ、歯周炎原性の強い細菌の増殖を促している可能性があります。そこ

で私たちはマウスまたはサルを用いた実験的歯周炎モデルにてC5経路を阻害したところ、Pgのみが歯周炎組織から選択的に除去されており、歯周炎も寛解することが明らかになりました¹⁾。続いて、自然に歯周炎を発症したサル（12年齢、ヒトでは50代にあたる）を用いた研究をおこないました。サルはフィリピン東部のリサル州、タナイ市のSimian Conservation Breeding and Research Centerに自然繁殖されています。同施設では約5000頭のサルが飼育されており、糖尿病や高血圧のサルも存在しています。その中から、28頭の歯周炎罹患サルを選択し、ヒトの歯周炎と同様な検査（歯肉の炎症指数や骨のレベル等）を行いました。自然発症型のサルにC5より上位に存在するC3拮抗薬を用いたところ、痛みを伴う機械的なプラーク除去なく歯周炎が改善しました^{2, 3)}。

続いて私は、歯周炎の治療法開発に取り組みました。遺伝子を欠損した様々なマウスに実験的に歯周炎を誘導したところ、DEL-1という分子に歯周炎抑制効果があることを見出しました。歯周炎において大きな役割をもつのが、強い炎症を起こす好中球と骨を溶かす破骨細胞です。そこで、DEL-1がこれらに与える影響を検証したところ、DEL-1は好中球の過度の遊走および破骨細胞による骨吸収の抑制を担っていることがわかりました。実際にヒトの歯周炎では、DEL-1が減少し、歯肉や歯根膜に多くの好中球の浸潤が認められます。また、骨を溶かす作用のある破骨細胞にDEL-1を添加すると、破骨前駆細胞から破骨細胞への分化と骨吸収抑制効果を同時にもつことが明らかになりました⁴⁾。さらに私たちは、DEL-1の誘導経路を明らかにすることで、DEL-1が歯周病治療ターゲットとなることを示しました⁵⁾。

現在では、DEL-1の歯周炎以外における新機能が明らかになってきており、私たちのグループではこの多機能なDEL-1を生体に安全な方法で誘導する方法を構築しようと試みています。直近では、DEL-1による骨再生および肺炎の治療法につ

いても発表しています（2020年新潟大学プレスリリース：DEL-1を介したエリスロマイシンの抗炎症メカニズムを解明しましたーエリスロマイシンによる肺炎や歯周炎の治療エビデンスを構築ーを参照ください）。

今回の若手科学者賞受賞にあたり、長年ご指導いただきました多部田 康一 教授、山崎 和久 教授、土門 久哲 准教授、寺尾 豊 教授、前田 健康 教授、Hajishengallis教授に心から厚く御礼申し上げます。さらに本賞応募に際し推薦して下さった先生方、大変な量の提出書類をまとめて下さった歯学部事務室の林 尚人さん、支え合ってきた同期の高橋 直紀 講師にも深く御礼申し上げます。



令和2年度文部科学大臣表彰 若手科学者賞

今年度は、新型コロナウイルスの流行が懸念されるために文科省での表彰式はなくなりました。立派な賞状とメダルをいただきました。

- 1) Maekawa T et al : *Cell Host Microbe*, 15 : 768-778, 2014.
- 2) Maekawa T et al : *J Immunol*, 192 : 6020-6027, 2014.
- 3) Maekawa T et al : *J Clin Periodontol*, 43 : 238-249, 2016.
- 4) Shin J et al : *Sci Transl Med*, 7 : 307, 2015.
- 5) Maekawa T et al : *Nat Commun*, 16;6:8272, 2015.

日本口蓋裂学会優秀論文賞受賞報告

矯正歯科学分野 市川 佳 弥

この度、日本口蓋裂学会雑誌（第44巻3号）に投稿した論文「新潟大学医歯学総合病院においてPNAM治療を行った片側性口唇口蓋裂患児における外鼻形態変化の短期的評価」が、2020年6月に名古屋で開催予定でした第44回日本口蓋裂学会総会・学術集会（新型コロナウイルス感染拡大予防のため誌面開催）にて、優秀論文賞を受賞致しましたのでご報告させていただきます。

当院では1973年より口唇裂・口蓋裂治療を開始し、現在では口腔外科、形成外科、耳鼻咽喉科、予防歯科、小児歯科、矯正歯科等の専門診療科で口蓋裂診療班を組織してチームアプローチによる総合診療を行っています。2008年からは術前顎矯正治療のひとつであるPNAM（presurgical nasoalveolar molding：術前鼻歯槽矯正）を導入し治療を行って参りました。PNAM治療とは口唇口蓋裂の患児に対し、テーピングおよび哺乳床にnasal stentを付与したものをを用い、口唇形成術までに口唇及び外鼻形態を改善させることを目的とした治療です。これを行うことで、口唇形成術時の組織移動量が減少し、術後の軟組織の緊張による後戻りが軽減できると考えられています。

本研究では、PNAM治療を行った片側性唇顎口蓋裂症例の初診時から口唇形成後までの外鼻形態の経時的変化について、顔貌写真を用いて術前顎矯正治療を行っていない症例と比較・検討することで、PNAM治療の有効性を明らかにすることとしました。

分析を行った結果、PNAM治療は口唇形成前では、鼻尖、鼻柱および鼻翼の偏位の軽減に寄与していることが示唆されました。一方、口唇形成後では、正面からみた鼻翼基部の偏位の改善を認めただものの、これがPNAM治療の効果であることは断定できず、治療開始時期による治療効果や、長期経過についてさらなる検討が必要と考えられました。

口唇口蓋裂の治療は長期に渡るうえ、個々の症例の状態、裂型、施設ごとの治療方針、術式、術者の違いによって比較検討が困難なことが多く、課題もたくさんありますが、今回の受賞を励みに今後の臨床、研究に従事していきたいと思えます。

本研究にあたりご指導を賜りました齋藤功教授、丹原惇先生、共著者の先生方、臨床を支えていただいております口唇口蓋裂診療チームの先生方、衛生士・看護師のみなさまにこの場を借りて心より感謝申し上げます。



令和元年度日本顎変形症学会学会賞を受賞して

組織再建口腔外科学分野 長谷部 大地

この度、論文タイトル「日本人におけるIndex of Orthognathic Functional Treatment Need (IOFTN) の有用性についての検討—第1報—」で、令和元年度日本顎変形症学会学会賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

この論文は、顎変形症における治療方法である外科的矯正治療の適応基準に関する研究結果をまとめたものです。顎変形症とは顎顔面領域の形態異常や咬合異常を伴う疾患で、全身麻酔下での手術と矯正治療を併用する外科的矯正治療を用いて咬合ならびに顎骨形態の改善を行います。外科的矯正治療を行うかどうかについては患者さんの意思が重要視されるため、われわれ医療者は患者さんに対して治療を行う前に明確な適応基準を示すことが求められています。しかし、顎変形症は多様な病態を呈するために、その適応基準は近年まで不明確な状態でした。2014年に外科的矯正治療の適応の指標としてIOFTNが英国で考案され、その後、多くの論文でその有用性が報告されています。そこで本論文では、当分野で外科的矯正治療を行った患者さんを対象にして、このIOFTNが日本人においても外科的矯正治療の適応基準として有用であるか、さらにはこれを基にして、日本人における外科的矯正治療の適応基準を考案できないかどうかを検証するために本研究を始めました。その結果、当分野で行った顎変形症患者さんにおいて、IOFTNでその妥当性を評価したとこ

ろ、すべての症例がIOFTNの評価でも妥当であったことが判明しました。私は当分野に入局して今年で17年目になります。入局してすぐに顎変形症の治療に携わらせてもらっていますが、現時点でも何を基準にして治療方法を選択するのか明確な基準がない状態でしたので、今回の研究に携わることができ、私にとっては非常に幸運なことでした。まだ、適応基準の確立には至っていませんが、本研究は今後の顎変形症における治療の発展において有用なものと考えており、本研究が日本顎変形症学会に評価していただけて大変光栄であり、今後の研究の励みになると思っております。

最後になりましたが、本研究に協力して頂いた本学歯科矯正学分野の齋藤 功教授をはじめ同分野の先生方、本論文作成をご指導していただいた当分野の小林正治教授にこの場をお借りして心から感謝申し上げます。



筆者は左から2番目

2019年度日本歯周病学会奨励賞を受賞して

高度口腔機能教育研究センター 原 実生



この度、2020年5月29、30日にビックパレット福島にて開催が予定されておりました第63回春季日本歯周病学会学術大会におきまして、2019年度日本歯周病学会奨励賞を受賞しましたのでご報告致します。

この賞は歯周病学の発展に寄与する学術論文を発表した若手研究者を表彰する制度で、過去2年以内に論文を発表した35歳未満の研究者に対し日本歯周病学会から授与されるものです。コロナ禍により学術大会はオンライン開催となり表彰式の開催も見送られました。10月に行われる秋季大会においてzoom形式で授賞式が開催される予定であり、まだ受賞の実感がありませんが歴史のある学会でこのような栄誉ある賞を賜りましたことを大変光栄に存じます。

受賞論文は「A bacterial metabolite ameliorates periodontal pathogen-induced gingival epithelial barrier disruption via GPR40 signaling」と題し、2018年にScientific Reportsに掲載された学位論文です。我々の研究グループでは、歯周病と全身疾患の関連について、腸内細菌叢に注目して解析を進めてきました。嚥下された歯周病原細菌*P. gingivalis*が腸内細菌叢の構成異常を誘導することで腸管バリア機能を低下させ、病原因子が全身性に悪影響をおよぼすことを明らかにしました。細菌由来の代謝

産物は様々な細胞機能制御に関わることが知られており、乳酸桿菌*Lactobacillus*が脂質代謝過程で産生する機能性脂肪酸HYAは、腸管バリアの保護作用を持つことが近年報告されています。我々はヒトの唾液中にHYAが存在していることを確認し、歯周炎の発症・進行におけるHYAの関与について、歯肉バリア機能を中心に解析を行いました。その結果、*P. gingivalis*刺激による歯肉上皮バリア機能低下に対して、HYAが抑制的に働くことを*in vitro*で明らかにしました。また実験的歯周炎モデルマウスにHYAを投与することで同様の結果が得られた上に、歯周組織における炎症性サイトカイン産生も低下していたことから、HYAが歯周炎の発症・進行を抑制することが示唆されました。

これまでの歯周病予防の研究の多くは歯周病原細菌をいかに減らすか、または歯周組織の炎症をいかに抑えるかをターゲットとしてきました。しかし本研究では歯肉上皮バリア機能を強化するという新たな視点に着目し、歯周病予防・治療薬の開発に貢献し、さらには全身疾患を予防しうるものと期待しています。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導を賜りました口腔保健学分野の山崎和久教授、歯周診断・再建学分野の多部田康一教授、高橋直紀先生、高度口腔機能教育研究センターの前田健康教授ならびにご協力いただきましたすべての先生方に心より感謝申し上げます。

日本口腔衛生学会 論文奨励賞を受賞して

予防歯科学分野 皆川 久美子

受賞論文名：「歯科医師および歯科衛生士数と歯科診療所で担うことのできる診療内容との関連（平成24年新潟県歯科医療機能連携実態調査より）」

この度、第69回 日本口腔衛生学会・総会にて、日本口腔衛生学会論文奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます（学会は2020年4月に誌上開催され、受賞講演は来年度の口腔衛生学会・総会に延期となりました）。

本研究は、新潟県の診療所に勤務する歯科医師、歯科衛生士の従事者数と、診療所で担うことのできる診療内容の関連について評価するため、新潟県で開設されている県内すべての歯科診療を対象に行った調査結果についてまとめたものです。

歯科診療所において、予防処置を行う上で歯科衛生士の数が必要であることは先行研究からも明らかですが、それに加えて、在宅歯科医療サービスの提供や障害者への対応、医療連携においても歯科衛生士の存在が必要とされることが本調査で明らかになりました。

また、本調査の結果から、本県における在宅歯科医療サービス、摂食嚥下指導および障害者への対応、および5疾病（がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病、および精神疾患）の医療連携体制は十分ではないということが分かりました。これらを充実させるためには、①歯科医師・歯科衛生士をはじめとした従業員のマンパワーの確保と知識・技術の向上、②それぞれ専門的な診療内容に対応するための設備整備、③サービスを必要とする患者・家族と診療所を結び付けられるようなシステムの構築が必要と考えられます。

今後、通院困難となった高齢患者や要介護者などの継続的な支援の観点から、一般歯科診療所な

どにおいても、在宅歯科医療、居宅療養管理指導の対応が必然的に増加するものと考えられます。今回得られた結果は、診療所の多岐にわたる患者への対応や病診連携を推進するには、まずは歯科医師の意識向上が前提であり、それを基に歯科衛生士をはじめとしたスタッフの人材確保、摂食嚥下指導等の専門性の高い診療分野の教育や研修、設備やシステムの充実が必須となると我々は考えました。

最後に、本論文の作成にあたりご指導頂いた葭原明弘教授、小川祐司教授、宮崎秀夫前教授、医局の先生方、調査にご協力いただきました新潟市歯科医師会・荒井節男会長および新潟県新発田地域振興局健康福祉環境部・清田義和先生にこの場をお借りして心より厚くお礼申し上げます。

今後とも日々精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



受賞報告

歯学部6年 遠藤 和 樹

この度、日本補綴歯科学会主催で行われた全国の歯学部生を対象とした学生技能コンペティション「第2回 JPS Student Clinical Skills Competition」にて、最終選考優秀賞を受賞しましたので、ご報告いたします。

課題は下顎左側第二小臼歯のCAD/CAM冠の支台歯形成でした。歯科治療がデジタル化している中で、CAD/CAM冠の適切な要件を満たす形成ができることは重要であり、とても良い機会であると思います、本コンペティションに参加させていただきました。

形成練習を行う際は、生体歯科補綴顎分野の先生方指導のもと、実習室を特別に使わせていただくことになりました。また、練習に使う人工歯だけでなく、普段の学生実習では使わない器具を用意していただき、恵まれた環境で練習することができました。練習で形成した歯を自分で評価し、良いと思ったものを先生方に見ていただき、多く

のことを指摘していただきました。

臨床の支台歯形成では、患者さんの口腔内状況も考慮して削除量などを決定します。ですが、本コンペティションの支台歯形成では、目標とする形成量やテーパーに、いかに近づけるかが勝負でした。ここまでの時間を歯1本だけに集中し、形成したことはありませんでしたので、歯科治療の精密さの必要性を再度実感しました。基本となる支台歯形態を突き詰める機会となり、形成の基本を習得できたと思います。

最後になりましたが、このコンペティションに参加する場を提供してくださいました魚島教授を始め、直接指導していただいた江口先生、サポートして下さった生体歯科補綴学分野の先生方にこの場をお借りして深くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

この経験を今後も生かし、一層の努力をしたいと思います。



第151回日本歯科保存学会学術大会 優秀ポスター発表賞受賞報告

う蝕学分野 枝 並 直 樹

この度、2019年11月に開催されました第151回日本歯科保存学会学術大会におきまして、リバスクラリゼーションの治癒メカニズムに関する研究結果を報告し、優秀ポスター発表賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。リバスクラリゼーションは、失活した根未完成歯を対象として、根管内に新生組織を誘導する再生療法的一种です。本治療法は、従来適応されてきたアペキシフィケーションに代わる治療法として定着しつつありますが、その治癒メカニズムは不明な点多いのが現状です。本研究では、根尖部組織の残存具合によって、治療後に形成される新生組織が

歯髓組織様であったり歯周組織様であったりすることを、ラットを用いた実験から明らかにしました。この研究結果は、リバスクラリゼーションの予後予測や、より優れた治療法の開発につながると考えています。今後は、細胞間の相互作用に着目し、より詳細な治癒メカニズムの解明を進めて行く予定です。



2019年度 新潟歯学会奨励賞 受賞報告

微生物感染症学分野 田 村 光

この度、2019年度新潟歯学会において、歯学会奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。今回受賞した演題名は「米由来ペプチドによる炎症制御機構の検索と歯周病治療への応用研究」です。

本研究では、米由来のペプチドを歯周病のモデルマウスに作用させ、炎症と歯槽骨吸収に対する効果を解析しました。その結果、米由来ペプチドは歯周組織における炎症と破骨細胞分化を抑制し、歯槽骨の吸収を抑制する効果を持つ可能性が示唆されました。また細胞を用いた実験においても、米由来ペプチドに同様の抑制効果を認めました。

人や動物だけでなく、米を含む植物等も感染に起因した異常に対して制御する方法を持つ可能性を実感し、とても興味深く思いました。

ご指導いただきました前川知樹先生、土門久哲

先生、多部田康一先生、前田健康先生、また寺尾豊先生はじめとする微生物感染症学分野の先生方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。



第61回日本臨床細胞学会総会春期大会 優秀演題賞受賞報告

組織再建口腔外科学分野 大学院3年 河原田 壮 史

学会参加者数1万人を超える第61回日本臨床細胞学会総会春期大会において優秀演題賞を受賞しましたのでご報告させていただきます。演題名は「液化化検体細胞診(LBC)法を用いたラット舌癌モデルにおける経時的な発癌過程の解析」です。

本研究は舌癌発症モデル動物にLBC法を応用することで、同一個体の病態変化を継続的に観察することができ、さらに正常から癌へと変化する過程を細胞・組織学的に捉える画期的な実験方法です。結果より、舌癌発症過程ではp53発現量が増加することが示され、前癌病変の悪性転化を推定する上で重要なマーカーであることが示唆されました。今後は、本モデルを用いて発癌過程における早期発見マーカーを同定する予定です。

今回の受賞にあたり直接ご指導頂いた口腔病理学分野教授 田沼順一先生および、所属長である組織再建口腔外科学分野教授 小林正治先生をはじめ、研究にご協力頂いた先生方に心より感謝を申し上げます。



日本歯科理工学会研究奨励賞を受賞して

生体歯科補綴学分野 木 村 龍 弥

この度2020年4月に開催されました第75回日本歯科理工学会春期学術講演会におきまして「ジルコニアへの新規表処理による接着強さへの影響」という演題で研究奨励賞を受賞いたしましたのでご報告致します。

今大会は新型コロナウイルスの影響でWeb開催となり、研究奨励賞はZoomを用いた審査となりました。画面越しではありますが審査員の先生方のお顔や表情がはっきりと見える形式のため独特の緊張感がありました。

本研究の内容に関して簡単に説明させていただきます。

ジルコニア製の補綴物の装着の際には、前処理としてサンドブラスト処理が推奨されています。一方で、サンドブラスト処理時に発生するジルコニア表面へのマイクロクラックが予後に及ぼす影響も指摘されています。そこで、サンドブラストを用いない表面処理方法として、ジルコニア表面

を金属膜化(メタライズ化)することによりレジンセメントとの化学的な接着力の獲得を試みました。本研究では、ジルコニア表面をチタンで薄膜コーティングすることによってレジンセメントとの接着力が獲得できるということが認められました。

実際の発表では質問5分と定められているところ、15分経っても終わらないほど多くのご質問や今後の研究の参考となる貴重なご意見を審査員の先生方からいただくことができました。

今後、さらに歯科臨床に寄与できるような研究成果をご報告できるよう研究に邁進したいと思います。

最後になりましたが誠に申し訳なくも時にご指導いただきました魚島勝美教授、青柳裕仁先生、大川成剛先生、金谷貢先生、ならびにご意見をいただきました医局の先生方に、この場をお借りして心より厚く御礼を申し上げます。

第25回 日本摂食嚥下リハビリテーション学会 学術大会奨励賞 受賞報告

摂食嚥下リハビリテーション学分野 高地 いづみ

このたび、2019年9月6・7日に新潟朱鷺メッセで開催された第25回 日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会にて奨励賞を受賞いたしましたのでご報告いたします。演題名は「咀嚼時間を決定する因子—米飯での検証」でした。

これまでの歯科医学・口腔生理学研究では、機能研究のテーマである「咀嚼」のゴールは「食塊形成」までであり、そこには前歯による咬断、臼歯による粉碎、唾液との混合などが含まれていました。近年、歯科医療のひとつとして摂食嚥下障害の臨床が取り上げられてからは、摂食嚥下運動の中の咀嚼の重要性が示唆されるようになったことから、「円滑な嚥下を誘発するための咀嚼運動の生理学的理解」を私自身の研究テーマとして、健常者を対象とした生理学的実験を行ってきました。

その結果、健常者において最大咬合力、最大舌

圧、刺激時唾液分泌量には大きな個人差があるにも関わらず、咀嚼中の硬さ、凝集性、付着性と水分値といった物性変化には個人差がないこと、一方で嚥下までの咀嚼時間にも個人差があり、咀嚼時間と刺激時唾液分泌量の間に関連を認められたことから、食塊表面性状や食塊移送が、嚥下惹起のキーポイントとなっているのではないかと示唆を得ました。今後は様々な食品についても同様の検討を行うこと、個人内で唾液分泌の変化がもたらす影響を調べることで、食塊移送を画像的に明らかにすることなどを課題として、さらに精進していきたいと思っています。

最後となりますが、ご指導賜りました井上誠教授、特任助手の竹井絵理先生、ご意見をいただきました先生がたに心より感謝申し上げます。

第30回 日本顎変形症学会総会・学術大会 優秀ポスター賞受賞報告

歯科矯正学分野 長崎 司

この度、第30回日本顎変形症学会総会・学術大会において、優秀ポスター賞を受賞致しましたので、ご報告させていただきます。演題名は「下顎前突症患者における嚥下時舌圧および顎顔面筋群筋活動の検討」です。

骨格性下顎前突症患者の嚥下運動は、健常者と比較すると経時変化に協調性がなく、口唇や頬部軟組織を含めた嚥下時運動様相については不明な点が多いため、舌運動と口唇・頬部軟組織の運動を同時測定し、時系列的関係性を検索することで、骨格性下顎前突症患者の嚥下時の機能的特徴の把握が可能となるのではないかと考え、本研究を立案しました。

結果、骨格性下顎前突症患者では、上下顎骨の

形態的不調和により舌の口蓋接触までの時間が延長していること、それを補うために口蓋周縁部の舌圧持続時間および顎顔面筋群の筋活動時間の延長が生じていることが示唆されました。また骨格性下顎前突症患者の各症例を上顎後方位と下顎前方位に分類すると、嚥下の一連の流れの中で、どの段階に異常があるか評価できる可能性が示唆されました。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました齋藤功教授、小野高裕教授、堀一浩准教授、福井忠雄先生、ご意見をいただきました歯科矯正学分野の先生方に心から厚く御礼申し上げます。

第74回日本口腔科学会学術集会 日本口腔科学会 ウェブ学会賞 受賞報告

歯科薬理学分野・組織再建口腔外科学分野 大学院3年 中村 彬彦



2020年4月15日から5月15日に開催された第74回日本口腔科学会学術集会において、「リボソーム合成関連因子HEATR1は、Pontin/Reptin complexと共に口腔扁平上皮癌進展に寄与する」と題したポスター発表にてWeb学会賞を受賞しましたのでご報告いたします。

Pontin/Reptin complexはmTORC1アセンブリなどタンパク質-タンパク質相互作用の足場としての機能を有し、癌細胞増悪への関与が報告されていますが、口腔扁平上皮癌における役割と

分子メカニズムに関してはよく分かっていません。本研究では、ヒト口腔扁平上皮癌由来細胞株を用いたin vitro試験にて、Pontin/Reptin complexの新規結合因子にHEATR1を見出しました。また、HEATR1がPontin/Reptin complexのタンパク質安定化に寄与し、mTORシグナル伝達経路を正に制御することで口腔扁平上皮癌細胞の増殖を促すことが示唆されました。

最後になりますが、今回の受賞にあたり、ご指導賜りました佐伯万騎男教授、柿原嘉人先生、ならびに組織再建口腔外科学分野の先生方に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

第74回 日本口腔科学会学術集会 ウェブ学会賞を受賞して

生体組織再生工学分野 組織再建口腔外科学分野 口腔病理学分野
羽賀 健太



このたび、2020年4月に開催されました第74回日本口腔科学会学術集会において、発表演題がウェブ学会賞を受賞いたしましたので、ご報告いたします。演題名は、「癌関連線維芽細胞は口腔扁平上皮癌においてTGF- β /SOX9経路を介して遊走および浸潤を促進する」です。癌関連線維芽細胞(CAFs)は癌間質の主要な構成要素であり、癌の進行に重要な役割を担うとされており、我々はCAFと癌細胞との相互作用におけるTGF- β /SOX9経路の

役割に注目し検討を行いました。結果は、CAFは通常の線維芽細胞と比較し、癌細胞の遊走能と浸潤能を促進し、癌細胞におけるSOX9の発現を有意に亢進させる一方で、TGF- β /SOX9経路を抑制することで浸潤は抑制されるというものでした。以上より、癌の進展におけるCAFsの重要性が示唆されました。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました、田沼順一教授、泉健次教授、小林正治教授、山崎学先生、共同演者の先生方に心より厚く御礼申し上げます。

2019年度 新潟歯学会学術賞 受賞報告

う蝕学分野 鈴木 裕 希

この度、2019年度の新潟歯学会において、学術賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。今回受賞した演題名は「Sub-MICのグルコン酸クロルヘキシジンが*in vitro*複合バイオフィーム形成に及ぼす影響」です。

今回、う蝕関連細菌種からなる*in vitro*複合バイオフィームモデルを用いて、最小発育阻止濃度未満 (sub-MIC) のグルコン酸クロルヘキシジン (CHG) 作用時のバイオフィーム形成促進機構について検証しました。その結果、sub-MICのCHGは、*Streptococcus mutans*のバイオフィーム形成関連遺伝子の転写に影響を与えることで、複合バイオフィーム形成を促進させることが示唆されました。

本研究ではバイオフィームに関する知識や実験の手技など、一から学ぶことばかりでしたが、いつも丁寧に根気強くご指導をいただきました先生方には大変感謝しております。

最後になりましたが、野村由一郎教授、竹中彰治先生、大墨竜也先生をはじめとするう蝕学分野の先生方に、この場をお借りして御礼申し上げます。



データサイエンティスト育成シンポジウム2019 最優秀発表賞受賞報告

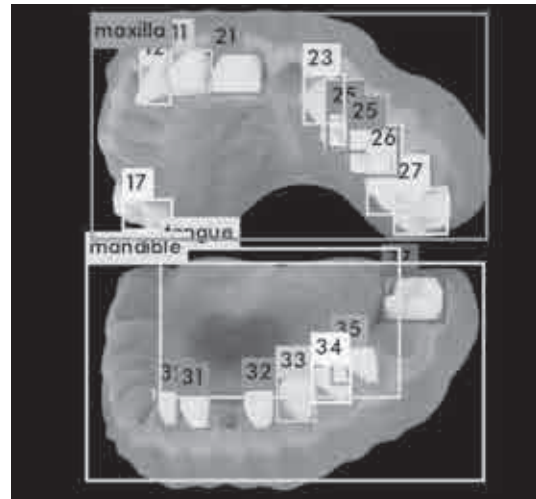
硬組織形態学 清野 雄多

2019年度1月末に標題のシンポジウムにて最優秀発表賞を受賞しましたのでご報告いたします。研究内容はAIによる残存歯の自動認識です。

災害時や損壊の著しい遺体の身元確認には歯が使われますが、残存歯の確認やカルテとの照合は人間が行います。私も実際のご遺体の口腔内診査を行い、死後チャートと呼ばれる書類を作成しました。これが思いのほか大変で、う蝕なのか裂溝に溜まった砂なのか、残根なのか死後に破折したのか、治療途中の支台歯なのか死後にクラウンが外れたのか、普段の診療では悩まないところで手が止まります。大規模災害時にミスなくチャートを書き上げるのは相当困難だと感じました。

そこで人間に代わって残存歯の確認を行うAIを開発しました。災害が起きないに越したことは

ありませんが、本研究で社会的に貢献できれば幸いです。



新潟歯学会報告

令和2年度 新潟歯学会総会および第1回例会報告

令和2年度新潟歯学会集会幹事
摂食嚥下リハビリテーション学分野
辻村 恭 憲

令和2年度と令和3年度の新潟歯学会集会係は、摂食嚥下リハビリテーション学分野が担当させていただきます。どうぞ宜しくお願いします。

新型コロナウイルス感染症の影響により、4月11日（土）に予定されていた総会は中止となり、今年度の最初の集会は7月4日（土）に「令和2年度新潟歯学会総会および新潟歯学会第1回例会」という形で開催されました。感染症拡大防止のために、会場を新潟医療人育成センターとし、参加者を演者（共同演者を含める）と評議員に限定させていただきました。さらに総会議事はweb上で報告、教授就任講演は延期と、多くの点で例年と違った形での開催を強いられ、関係者の皆様には多大なご迷惑をおかけしました。なお、例年総会で行っている新潟歯学会学術賞の授与式は、別日に歯学部長室にて行われました。2019年度の歯学会賞は鈴木裕希先生（う蝕学分

野）、奨励賞は田村光先生（微生物感染症学分野）に授与されました。おめでとうございます。

学会当日は、学外3名を含む89名（Zoom参加5名）の会員にご参加いただき、一般口演20題の発表が行われました。多くの学術大会がオンライン開催されている状況下において、会場参加者の前で発表し、面と向かって質疑応答を行う機会を作れたことは、大学院生をはじめとする演者の先生方にとって有意義であったと感じています。座長をお引き受けいただいた先生方、演者および参加された会員の皆様のご協力により、令和2年度新潟歯学会総会および新潟歯学会第1回例会を滞りなく終了できましたことを、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

新潟歯学会に関する詳しい情報は新潟歯学会ホームページをご覧ください（<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>）。



会場風景 1



会場風景 2



新潟歯学会賞授与 鈴木裕希先生
(左) と前田歯学部長

研修医プログラムを修了して

研修プログラムを修了して

歯科臨床教育学分野 齋藤 豪

初めまして、歯科臨床教育学分野大学院1年の齋藤豪です。私はプログラムAにて研修をさせていただきました、今年度も引き続き歯科総合診療部にて診療と研究を行っています。今回、「研修医プログラムを修了して」というテーマで執筆する機会を頂きましたので、1年間の臨床研修について触れさせていただきたいと思います。これから研修先を決める学生の皆さんへ少しでもお役に立てれば幸いです。

私はプログラムAを希望し、研修を行いました。希望した理由は、将来的に1口腔単位を考えて診療を行える歯科医師になりたいと考え、一般診療を幅広く学びたいと思ったからです。また、在学中から歯学教育にも興味があり、卒業後は当分野大学院進学を考えていたのでプログラムAを希望しました。

研修では、研修医は1人の担当医として患者を担当し、1口腔単位での診療を行います。私は研修当初に20人ほどの担当となり、新患を担当させて頂き最終的には30人ほどの患者を担当しました。1人の患者を任される責任感が生まれ、それが自発的な学習の意欲となりました。研修ではまず初めにすべての患者の治療方針を自らで検討し、指導医との確認を行います。患者の問題点は何か、それを解決するためにはどのような治療が必要か、そのすべてを自分で考える機会が与えられます。自らで考え、学習を行う環境が自己成長につながりました。自分で考えなければならない点で不安に思う人もいるかもしれませんが全く心

配ありません。治療方針の検討から、その日の治療までわからないことがあれば常に指導医の先生が相談に乗ってくれます。指導医の先生だけでなく、医員やレジデント、大学院生の先生方は研修医により近い立場の存在であり、忙しい仕事の合間でも快く相談に乗ってもらえます。私自身、数多くの先生方の心強い手助けがあってこそ研修を無事に修了できたと思います。

また、プログラムAでは2人1組のペアを組み、診療や業務、他科研修を行います。治療に困ったときや相談したいときには、なにより近くにパートナーがいます。時には他愛もない話で夜遅くまで控室にいたこともありました。昨年度は22名の同期がいました。他大学出身の先生も多々様々は話を聞けてとても貴重な経験でした。研修後に近況報告することも多く、自分ももっと成長しなければならないと実感させられます。

最後に、1年間で指導いただいた先生方、サポートして下さる歯科衛生士、看護師の方々、そして研修同期の皆さんに感謝申し上げます。大変お世話になりました。今後ともよろしく願い致します。



指導医班での写真（筆者右端）

～研修プログラムを修了して～

生体歯科補綴学分野 工藤莉奈

はじめまして、生体歯科補綴学分野レジデントの工藤莉奈です。私は2019年3月に本学を卒業後、4月より1年間、新潟大学医歯学総合病院臨床研修プログラムB（Bコース）で研修しました。研修の1年間を振り返り、書かせていただきたいと思います。

まず私がBコースを選んだ理由についてです。最初は新潟大学以外も見てみたいと思い、外部の研修先というのも考えていくつか見学に行きました。しかしそこで改めて、自分が実習している新潟大学で、担当医として治療計画を立て、診療できる研修プログラムが魅力的だと思いました。また、半年間は自分の興味のある専門診療科で、もう半年間は大学での診療だけでなく開業医での診療を経験できる機会はあまりないなと思いBコースを選択しました。

4月からの前半半年は埼玉県八潮市にある開業医「今井歯科」で研修させていただきました。開業医は1日の診療件数もとても多く、1人あたりの診療時間も短いため、国家試験を終えて日々ガラガラ過ぎていた私には4月はじめは1日があっという間でした。診療は大学では接する機会が少ない小児も多く、いい経験となりました。その他セミナーへの参加や豚顎実習なども経験できました。スタッフの方々・先生方もとても優しく、他大学の研修医の先生もいて、楽しく有意義

な半年間の研修となりました。

10月からの後半半年は冠ブリッジ診療科で研修させていただきました。学生の頃の冠ブリッジの実習が好きだったこと、補綴に興味があり、担当医として多くの症例を経験できるかなと思い選択しました。研修医では多くの症例にふれることができたのに加えて、半年の間に5回の症例検討をする場がありました。1人1人の患者さんについて、1口腔単位での診査・診断・治療計画を考え、それについて先生方からアドバイスをいただくことで自分では気づけなかったことや考えなければいけないことに気づくことができました。また先生方の診療を間近で見ることができ、質問や相談にも親身になって時間を割いてくださり、非常に勉強になりました。

ご指導してくださった先生方、研修先の方々への感謝、研修医で経験したことを忘れずに日々勉強し、成長していきたいと思います。最後まで読んでいただきありがとうございました。



世界大学学術ランキング2020について

大学ランキングで有名なものに「QS世界大学ランキング」(Quacquarelli Symonds : QS)、「THE世界大学ランキング」(The Times Higher Education - Thomson Reuter : THE-TR)、「世界大学学術ランキング」(Academic Ranking of World Universities : ARWU)があります。この中で、世界大学学術ランキングは上海交通大学(中国)の高等教育研究所・世界一流大学研究センターが毎年発表している科学研究の業績を評価している大学ランキングです。2007

年からは分野別ランキングを公表され始め、2017年からは歯学分野(Dentistry & Oral Sciences)が公表されています。新潟大学歯学部は2020年度版ランキングで、2018年度版(世界38位)に続いて、世界39位(国内3位)となりました。(http://www.shanghairanking.com/Shanghairanking-Subject-Rankings/dentistry-oral-sciences.html)。さらなる研究活動の活性化のため、Elsevier社の協力を得て、本歯学部の研究の質の分析を行っています。

前川准教授(高度口腔機能教育研究センター)の文部科学大臣表彰について

歯学部の前川知樹准教授(研究推進機構・研究教授)が令和2年度科学技術分野の文部科学大臣表彰「若手科学者賞」(応募者数353名、授賞者数97名)を受賞しました(https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_00187.html)。「科学技術分野の文部科学大臣表彰」は、文部科学省が科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者を顕彰するもので、

若手科学者賞は、萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績をあげた40歳未満の若手研究者が対象となるものです。若手科学者賞の受賞は本学において前川准教授が初となりました。なお、詳細については、前川准教授の受賞報告を参照してください。

講義室の新設について

旧歯科診療棟(旧歯学部附属病院)の改修工事が行われ、令和2年3月末に「新潟大学ライフイノベーションハブ」が竣工しました。前号で報告

したとおり、旧F、H棟は旭町部局、全学センターの共通センターとして改修され、旧G棟は取り壊され、駐車場として整備されました。歯学部は旧

歯学部附属病院会議室（2階）と旧保存科診療室（3階）の跡地に講義室2室を新設しました。2階の講義室は通常の講義仕様として、また3階の講義室は「インテリジェンス・アクティブラーニングクラスルーム（通称：iALC1）」として整備されました。このiALC1にはICT設備や多目的に使用できる什器類を導入し、アクティブラーニング、講義収録や国内外機関との遠隔教育、自習スペースなど幅広く使用されることとなっています。なお、この講義室の新設に伴い、E棟1階に設置していたマルチディスカッションルームは名称をiALC2に変更しました。



3階iALC1

新潟大学歯学部プロモーションビデオの公開について

本学部では海外歯科大学・歯学部、関係機関との海外ネットワークづくりを行っており、また学生レベルでの国際交流に力を入れています。この度、関係各位の協力を得て、歯学部プロモーションビデオ（英語版）を作成し、YouTube上に公

開しました（<https://www.youtube.com/watch?v=6gwHpo9bHYw>）。作成したビデオは、主に日本への留学を希望する海外の歯学部学生や研究者に本学部の教育・臨床・研究の特色を紹介する内容となっています。

デジタルデンティストリー機器の導入について

歯学部が獲得している教育に関する機能強化促進経費によって、医歯学総合病院歯科外来の臨床実習スペースにPrimescan (Dentsply Sirona:<https://www.dentsplysirona.com/ja-jp/explore/cerec/primescan.html>) 一式が設置されました。従来、印象採得（削った歯の型採り）や作業模型（削った歯の形を石膏で再現する）、修復・補綴装置（金属やセラミック製の被せ物や詰め物）の製作は歯科医師や歯科衛生士、

歯科技工士が手作業で行っていましたが、近年のデジタル技術の進歩により、これらの作業の大部分をデジタル機器に任せることが可能となり、スキャナーやコンピュータを用いて行われるようになっていきます。

この機器を用いると、口腔内スキャナーで撮影した患者さんの口腔内の状況がコンピュータ上にリアルタイムで3D画像として再現・構築され、患者さんのかみ合わせの特徴に合わせてデザイン

した被せ物や詰め物が金属やセラミックの塊から自動で削り出されます。これらのデジタル機器を用いた歯学や歯科治療はデジタルデンティストリーシステムとよばれ、一般的な治療法としての地位を確立しつつあります。またこのデジタル・テクノロジーの進歩は著しく、デジタルデンティストリーについては歯科医師国家試験にも出題されるようになってきています。そのため、これらの機器の知識や操作法は歯科医師、歯科衛生士に必要な不可欠なものと考えられます。今回、導入したシステムはすべての作業をチェアサイドで行う

ことができ、また精度の高い被せ物や詰め物を短時間で作成することができるという特徴をもっており、数あるデジタルデンティストリーシステムのなかでもトップクラスに相当します。現在、臨床実習を行う学生のみならず、病院歯科に勤務する歯科医師、歯科衛生士も歯科診療で活用できるよう準備を進めています。またハードの整備に加え、機器を活用するための教育内容を見直し、この分野の教育のさらなる充実を図りたいと考えています。（歯科臨床教育学 教授 藤井規孝）



口腔内スキャナー（Primescan）



専用ミリングマシン（Primemill：右）とシンタリングファーンズ（SpeedFire：左）

高圧蒸気滅菌器導入について

この度、E棟1階に高圧蒸気滅菌装置（三浦工業、RK-030EH）を設置しました。高圧蒸気滅菌装置は、主に各分野で所有する実験器具や実験動物飼育器材を滅菌するためのものです。この装置の大きな特徴は、両扉式になっており、汚染領域と清潔領域が区別できることにあります。また、121度の標準滅菌以外にも135度の高温滅菌が可能

であり、必要な条件でしっかりと滅菌することができます。

感染症が大きな問題となっている昨今、このように大型の滅菌装置が歯学部導入されたことは大変有意義なことであり、皆様には是非有効活用していただきたいと思います。

（口腔生化学 教授 照沼美穂）



高圧蒸気滅菌装置RK-030EH（汚染領域側）



清潔領域側の様子

WEBオープンキャンパスの開催について

令和2年8月16日（日）、17日（月）の2日間にわたり、WEBオープンキャンパスが開催されました。今年のオープンキャンパスは、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、新潟大学全体として対面での実施は中止となり、初めてオンラインで実施することになりました。

今回のWEBオープンキャンパスで歯学部が用意したプログラムは、次のとおりです。

- ・ 学部長挨拶
- ・ 学部全体説明
- ・ 入試概要説明
- ・ オンライン模擬講義
- ・ バーチャルスライドシステム体験
- ・ オンライン校舎内見学ツアー
- ・ 歯学部実習風景動画
- ・ 学生とのオンライン座談会

学部長挨拶は、資料閲覧の形でオープンキャン

パス特設サイトに掲載しました。学部全体説明は小野和宏学務委員長が、入試概要説明は佐伯万騎男入試実施委員長がそれぞれ説明動画を用意してくださり、参加申込者のみへ限定公開をしました。

オンライン模擬講義は8名の教員に講義動画を作成していただき、公開しました。参加者が自由に閲覧することができるというオンラインの利点を踏まえ、講義の時間を短くして、動画の種類を増やすなどの工夫をして実施しました。掲載した講義動画の表題は次のとおりです。

- ・ 食べることの大切さを知る（井上誠教授）
- ・ 口と全身の病気のかかわり（多部田康一教授）
- ・ 再生医療のはなし（泉健次教授）
- ・ 介護予防とお口のケア（大内章嗣教授）
- ・ お口の健康で元気で長生き（葭原明弘教授）
- ・ 感覚とは？（岡本圭一郎准教授）
- ・ 歯科における私たちの仕事（長澤麻沙子助教）

・歯ならび、噛み合わせを直す矯正歯科治療とは？（丹原惇助教）

バーチャルスライドシステム体験は、田沼順一教授の全面的な協力のもと、組織学や病理学の実習で活用しているバーチャルスライドシステムの一部を参加者に公開して、実際に病理組織の標本を観察できるよう準備しました。オンラインでは体験型プログラムを用意するのが難しかったため、参加者が自らシステムを操作できる本プログラムは貴重なものとなったと思います。

オンライン校舎内見学ツアーは、歯学部校舎内の実習室等を、360度カメラを用いて撮影し、3Dオブジェクト掲載サイトを使用して限定公開しました。また、実習室が実際にどのように使用されているかは写真だけではわからないため、実習風景の動画を作成し、掲載しました。

学生とのオンライン座談会では、WEB会議システムZoomを用いて、参加者を学部在生と一

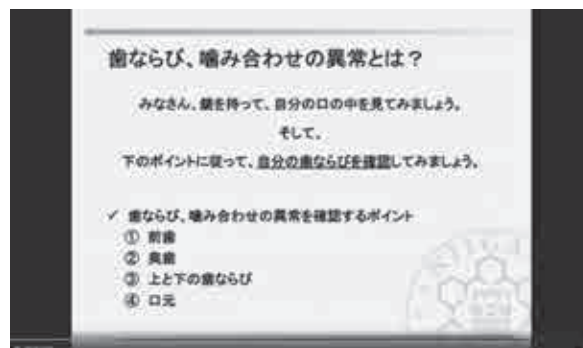
緒にミーティングに招待し、参加者からの質問に学生が答えるという形で実施しました。座談会中は上級生が主に進行を担い、参加者から多くの質問を引き出してくれたため、活発で有意義な座談会となりました。

参加者からは、限られたプログラムの中で、歯学部での学習内容や学生生活、校舎内設備などの情報を得ることができてよかったという声があり、おおむね好評をいただけたと考えています。また、遠方に在住して対面での参加が難しい方からは、負担なく参加できるためよかったという声も聞かれるなど、オンラインでの実施の利点も垣間見ることができました。一方で「実際に行くことができずに残念」「対面にはかなわない」などの意見も多数見られたため、来年度は対面でのオープンキャンパスが開催できることを強く願っています。

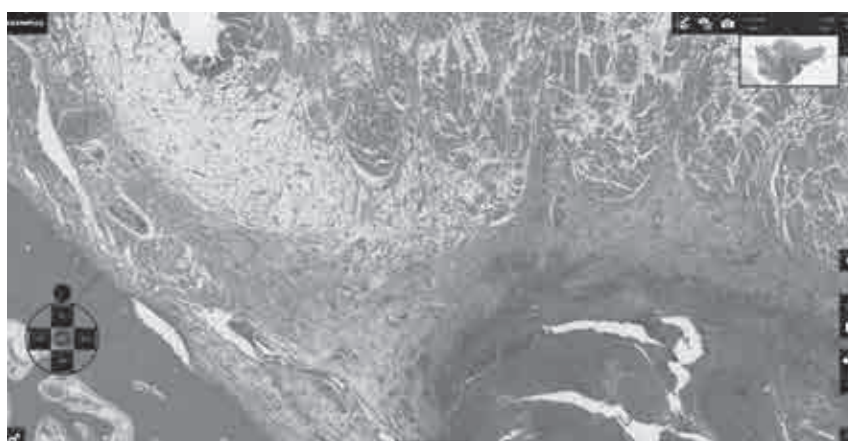
（学務係 櫻井拓仁）



オンライン校舎内見学ツアー



オンライン模擬講義



バーチャルスライド体験

令和2年度補正予算による 遠隔講義システムの導入について

政府は、令和2年度補正予算の中で、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、大学等において感染している状況下で、学生が「いつでも・どこでも・誰でも」学習できるよう、デジタル技術を活用した遠隔授業等を積極的に活用できる環境の整備を進めることにしています。新潟大学歯学部では、学生が複数の教室に分散してリアルタイムで講義を受講できる遠隔講義システムを補助申請・採択され、この度、導入されました。講義送信装置をiALC1、講堂、小会議室2に設置し、受信装置を

第1～7講義室に設置しました。iALC1、講堂からは最大9拠点へ、小会議室2からは最大3拠点へ講義配信が可能となるシステムです。また講義収録システムも備えており、遠隔講義中の録画も可能となっています。

このシステムの整備により、3密を回避した対面型講義が可能となり、Zoom等による非対面型講義と併用することで、高い学修効果が得られると考えています。



4月に完成した講義室「インテリジェンス・アクティブラーニングクラスルーム（通称：iALC1）」からの配信テストの様子



iALC、講堂に設置した送信用モニター画面。配信先の接続状態を確認することができる。

医療連携口腔管理治療部

医療連携口腔管理治療部 副部長 新 美 奏 恵

1. はじめに

医療連携口腔管理治療部は2020年4月に新しく開設されました。現在高木律男部長を始めとして、副部長1名、特任助教1名の専従・専任歯科医師を中心に、各歯科専門診療科や歯科衛生部門、看護部門、患者総合サポートセンターなどと協力して診療を行っています。医療連携による口腔管理は2011年新潟大学歯学部附属病院において口腔支持療法外来という特殊外来としてスタートしています。2012年の医歯学総合病院新外来棟移転に伴い医療連携口腔管理チームとして再編され、その後2020年4月に中央診療部門の一つとして設立された歯科では顎口腔インプラント治療部とともに一番新しい診療部門です。

2. 臨床について

医療連携口腔管理治療部では①感染対策（口腔感染巣による全身への影響や周術期を中心とする誤嚥性肺炎の予防）、②口腔粘膜管理（放射線治療、化学療法による粘膜炎の予防や症状の緩和）、③顎骨壊死対策（薬物治療や放射線治療による顎骨骨髄炎の予防）を中心に診療にあたっています。また、2017年8月からは入退院支援部署である患者総合サポートセンターで入院治療に際して歯科受診が必要な患者のスクリーニングを開始し、早期の歯科介入につなげています。

3. 教育について

これからの歯科医師には多職種と連携できることが求められています。歯科医師同士だけでなく、診療チームの構成員である他の医療従事者と共通の知識で検討を行い、治療を行うことができる歯科医師として活躍するためには、様々な疾患

や、その治療、また治療によって出現する口腔内の症状の知識が必要です。2022年度には歯科医師臨床研修制度の見直しが予定されていて、医科歯科連携に関する研修を必修とすることが検討されていますが、それに先駆けて、歯科総合診療部の藤井部長のご協力を得て、本年の7月から臨床研修歯科医師の研修を開始しました。1週間と短い研修期間ですが、研修期間中は新患の患者さんを担当し、主疾患とそれに対する治療を理解した上で、歯科として必要な治療の選択などを指導歯科医師の下に行ってもらっています。将来多くの知識を持った、患者さんや地域に貢献できる歯科医師となってもらえるよう、研修内容もより良いものにしていきたいと思っています。

4. 研究について

医科歯科連携による歯科の介入によって、誤嚥性肺炎や創部感染の予防、口腔機能の向上、顎骨壊死の予防や、それによるQOLの向上など、多くのメリットがあることは広く知られるようになりました。それを踏まえて、医療連携口腔管理治療チームの時代には、歯科医師、歯科衛生士それぞれの立場から歯科の介入が有用であった症例の提示や、チームの診療実績の分析などの学会発表を行ってきています。また、ラジオ番組などを通して口腔ケアの必要性を広く一般の方にお知らせする取り組みも行ってきました。その一方で口腔ケアのどのような点が、どの程度、何に役立っているのか、といった客観的な評価や、患者さんの主観的なQOLに対する評価を用いた検討などはこれまで他施設でもあまりなされてきていません。新しい診療部門として、患者さんや病院全体に貢献できるよう、このような研究も部員とともに行っていきたいと考えています。

顎関節治療部から顎口腔インプラント治療部へ

顎口腔インプラント治療部 副部長 荒井良明

2019年の5月にインプラント治療部の星名秀行講師が退職されました。その後次の講師が募集されないことが決定し、2020年3月末までにインプラント治療部の全ての歯科医師が退職されました。非常に残念ながら2006年4月に開設されたインプラント治療部は14年間の幕を閉じることとなりました。

2020年初めに、副病院長より顎関節治療部でインプラント治療部門も統括してほしいとの依頼があり、2020年4月から、名称を「顎口腔インプラント治療部」と変更し、「顎関節治療部門」と「口腔インプラント治療部門」の2部門を統括する中央診療部門として診療と研究、教育を行っていくこととなりました。しかし専任部員は顎関節治療部の5名のみですので、大人数の引き継ぎ患者に加え、昨年度中断されていた手術が蓄積されており、多忙な診療体制が続いています。部長は生体歯科補綴学の魚島勝美教授になりました。

「顎関節治療部門」に関しましては、昨年の歯学部ニュースで4ページにわたって特集して頂きました通り、2006年に開設後、『世界標準の診断・治療を、臨床と研究と教育に浸透させる』ことを目標に14年間経過し、診療データも順次蓄積され、英文雑誌にも定期的に研究成果を発表でき、研修医の卒後教育の評価も高く、十分に機能した臨床システムが構築できたと自負しております。

一方、「口腔インプラント治療部門」に関しましては、未だ当院の臨床成績も算出されていない状態であり、この1年間は全力でこちらに注力し

て、将来にインプラント治療を担当していただく先生方に自信を持って引き継げる臨床システムの構築をしていく所存です。

当院の「口腔インプラント治療部門」の特徴は、大学病院の中にあっても診療科間の垣根が低いことです。口腔外科や補綴科、歯周科といった領域を超えて、1口腔単位で検討し、地域の先生方から紹介された難症例に対応しています。もう一つの特徴としては、間口を広く開放している一方で、インプラント治療を安全かつ適切に提供できるよう、一定の基準を満たすまでインプラント治療を担当することができないように院内独自のインプラント認定医コースを設けていることです。まず、登録医として指導医の下で手術から補綴までを5症例見学することで担当医となります。担当医として指導医の下で埋入手術（骨増生手術を含む）から補綴までを実際に5症例担当することで、初めて認定医として、院内で独立してインプラント手術や補綴ができるようになるシステムです。この間に一定数の症例検討と半年以上の予後観察後の症例報告を行うこと、および学会での発表が求められます。このような認定システムと全症例について検討会での症例検討の義務化によって、院内のインプラント治療を全て把握し、その質を保証できると考えております。

今後も地域の高次医療機関として求められる役割に柔軟に対応し、さらに地域連携を推進し、大学病院としての特徴を生かし、患者の口腔機能の維持・回復を通じた地域医療への貢献に尽力したいと考えております。

野田 忠先生を偲んで

新潟大学医歯学総合病院 小児歯科障がい者歯科 大島 邦子

まだ蒸し暑い梅雨真っ盛りの7月初め、野田先生がご逝去されたとの報に接し、言葉を失いました。

野田先生は、東京医科歯科大学をご卒業後、1979年4月に、37歳という若さで国立小児病院（現国立成育医療研究センター）から新潟大学歯学部小児歯科学講座の初代教授として赴任されました。赴任早々始まった講義に続き、9月からは小児歯科外来の診療をお一人で朝から夕方まで毎日行われたそうです。私が学生だった頃には、すでに多くの医局の先生方を束ねておられましたが、小児歯科外来では、いつも野田先生の周りはひときわ賑やかでした。泣いて嫌がる子供も、心配そうなお母さんも、野田先生の歌が終わる頃には、いつの間にか野田ワールドに取り込まれ、笑顔で帰っていかれる様はまさに野田マジックでした。また、先生は毎月、学生のためのゼミを主催してくださり、英語の本や研究論文をつたない日本語で訳す私たちをニコニコ見守り、多くのスライドを交えて、臨床のお話をたくさん聞かせてくださいました。もちろん、そのあとはお菓子や飲

み物もふるまわれ、遅くまで懇談会が続くこともありました。どの教授よりも（小声）学生を愛し、医局の先生方を家族と呼ぶ姿を見て、入局を希望しました。

私が入局した年、野田先生はスウェーデンほか数か国に留学されました。う蝕予防の先進国であると同時に、女性の社会進出においても日本の数段上に行く北欧での生活は、男女共同参画などの言葉も存在しなかった日本において、自らそれを実践されてこられた先生の自信になったのではないかと思います。

帰国されてからも先生は精力的に外来に出られ、多くの小児や障害者の診療を継続されました。当時は非協力的な小児や障害者の歯科治療を行える施設はほとんどなく、県外からも多くの患者さんが来られましたが、野田先生はカルテがたまっていくほど、ドンドン調子が上がってくるようで、アシスト3名でもついていけない速さでした。実際、自分で診療してみると、野田先生だとサビを1-2曲歌う間に終わる診療が、私の場合フルコーラス10曲以上歌わないと診療が終わらないことは



すぐ気づいたので、歌わずにすみましたが。

その後、野田先生は1995年から1997年から歯学部附属病院院長を、2003年からは歯学部附属技工士学校長も併任され、多忙を極めておられましたが、いつも優しい笑顔をたたえ、小首をかしげながらパイプをくゆらし、「構わんよ」と許してくれるいつものスタイルを崩すことはありませんでした。

また、同時期1995年からは、五十嵐で全学講義「食べる」を主宰されました。先生のご人脈を駆使した講師陣は歯学部内にとどまらず、新潟産の私でも普通なら一生お会いできなかったであろう新潟の各分野の著名人が名を連ね、聴講票の競争倍率100倍というおぼけ講義となり、2005年新潟大学教育褒章を受賞されました。

「食べる」ことに関しては、生理学のおよび解剖学的観点から大学院生とともに研究に励まれるとともに、度々医局でも料理の腕前を発揮され、

医局員にふるまってくださいました。留学生も多く受け入れ、野田先生の発案で、中国の留学生の時は餃子、バングラデシュの時はカレーなど、医局員総出で料理を作り楽しんだことを思い出します。

2007年にご退官ののちは、新潟リハビリテーション大学教授、2011年からは同学長を歴任され、昨年春、令和初の瑞宝中綬章を受章されました。

山を愛し、ご家族を愛し、小児・障害者を愛し、学生を愛し、医局員を愛し、パイプを愛された先生でした。弱いところなどおくびにも出さず、いつも颯爽とされていました。突然、誰の世話にもならず、梅雨空を吹き飛ばす爽やかな風のように、さっと去られたのは、いかにも先生だなとも思います。

心からご冥福をお祈りいたします。

(2020年6月27日ご永眠)



素 顔 拝 見



口腔生命福祉学科福祉学講座・准教授

中 村 健

私の好きなモノ

夏は黒埼茶豆で乾杯！

2020年4月、新潟市役所の福祉畑から転職し准教授を拝命しました。黒埼町生まれ黒埼町育ちの中村と申します。

私には二つの好きなモノがあります。ひとつは「生活保護の仕事」、ひとつは「ビール」、このうち前者の話を中心にお伝えしたいと思います。

1975年（昭和50年）生まれ、いわゆる就職氷河期世代にあたります。若い人にはジャンプ・ファミコン世代と言った方がなじみやすいでしょうか。ドラクエはロト3部作、ガンダムは宇宙世紀がドンピシャです。小学生から高校生にかけて、野球部・器械体操部・バレーボール部に所属しましたが、運動神経が良いわけでもなく大層な成績は残せませんでした。雪国新潟ということで、スキーは物心つく前から始めており、20代の頃は八海山のコブ斜面を楽しめていましたが、30歳の時にハーフパイプで右大腿骨を折ってしまい、数年の自粛期間を経て現在は年1回子どもと一緒に整地を楽しむ程度です。性格は楽道家・お調子者・八方美人だと自認しています。

1998年3月、本学経済学部を卒業しました。成績は良くありませんでした。単位を落とした科目もいくつかありました。唯一満点を取れた科目が社会保障であったのは、その後の私の人生を暗示していたのかもしれない。

大学卒業し、地方公務員となりました。恥ずかしながら、初めて福祉事務所勤務（ケースワ

カー）を命じられた時は「せいほ？生命保険ですか？」と質問してしまうほど、社会福祉に関する知識も技術も持ち合わせていませんでした。

配属された新潟市福祉事務所では、2020年3月をもって退職された中川兼人准教授と机を並べて業務にあたっていた時期もありました。多くの同僚たちが生活保護業務を「ストレスがたまる」「不人気職場」「早く異動したい」と否定的に捉えていました。私は「頼られることが嬉しい」「感謝されることが多い」「家庭訪問の時間が楽しい」「スケジュールが立てやすく休みを取りやすい」と肯定的に捉えており、やりがいも感じていました。

福祉事務所勤務4年目の2006年度、新潟市役所は福祉専門職（ソーシャルワーカー）の採用を始めました。同年4月、6名の若きソーシャルワーカーが入庁し、うち2名が福祉事務所へ配属されました。この二人の若者との出会いが私の人生の大きな転機となりました。50名ほどいるケースワーカーの中から、教育係に抜擢された私は、これからの福祉行政を背負って立つ人材の育成を任されたことに喜びを感じながら、業務を丁寧に教えていました。そんなある日、この二人が発した言葉に私は大きなショックを受けました。

「こんなところは福祉事務所じゃない」「いつ仕事を辞めようかと悩んでいる」

私を含め福祉事務所の先輩職員の多くが、“何の専門性も持たない”ばかりか“生活保護利用者に対して偏見や差別の眼差しを向けている”ことを見抜いていたのです。ダイヤの原石を“磨く”どころか、私たちの存在自体が原石を“ススまみれ”にしていたと、深く反省するに至りました。そして二人から言われたもう一つの言葉で、業務に対する価値観が大きく変わりました。

「生活保護利用者の中には不合理な言動をする人もいるけど、嫌だと思えない、人生のどこかでそういう生き方を選択するしかなかったんだと思

う、生まれたときは誰だって純真無垢なのだから…、だから私はどんな人にも寄り添いたい！」

その数年後、高橋英樹教授が講師を務めていた研修会で耳にした「ソーシャルワークの肝は、共感しがたい人にいかに共感できるか」との教えにつながるものでした。

この新人ソーシャルワーカーとの出会いをきっかけに「希望を持った若者に二度とこのような悲しい思いをさせてはいけない」「福祉事務所の雰囲気を変えたい」「まずは自分が変わるために、しっかり学ぼう」と強く決意しました。

多くの研修会やセミナーへ参加し、他機関の専門職とつながりを持ち、知識の習得と多様な価値観に触れたことで、ソーシャルワークへの興味が加速度的に増していきました。多くある出会いの中には、漫画家柏木ハルコさんとの出会いもありました。柏木さんは2014年からビッグコミックスピリッツで新人ケースワーカー奮闘記「健康で文化的な最低限度の生活」を連載しています。2012年以降、毎年お会いする機会があり、私のエピソードや支援手法を劇中で使用していただくこともありました。莫大な取材に基づくリアリティあふれる内容で「第64回小学館漫画賞」を受賞、厚生労働省主催のケースワーカー研修でも使用されるなど教材としても高く評価されています。2018年には吉岡里帆さん主演でテレビドラマ化もされました（共演は井浦新さん、田中圭さん、山田裕貴さん、川栄李奈さんなど）。続編に期待したいです。

多くの学びと出会いを経た私は、他のケースワーカーたちが「困難ケース」と呼び嫌がる世帯の支援に面白さとやりがいを感じるようになり「中村変わっているね」を誉め言葉と受け取るようになります。“類は友を呼ぶ”とはよく言ったもので「ゴミ屋敷の支援は楽しい！困難ケース大好き！」と豪語する他機関のソーシャルワーカー達と出会い意気投合し、チーム支援を楽しみました。仲間が出来れば当然「反省会やろう！」と頻りにアルコールを伴う懇親会を開催する訳です。

私のもうひとつの好きなモノ「ビール」の話です。

宴会では「ビールがあれば何もいらぬ」「ビールがなければ生きていけない」が口癖です。特にクラフトビールの魅力にはまっています。現在はスーパーやコンビニでも手軽に手に入れることが出来、良い時代になりました。2018年にビール仲間と「よなよなエール」公式ビアレストラン「よなよなビアワークス」へ行きましたが、ビールも料理も格別のうまさでした。また行きたいお店です。

最後に抱負を述べて締めくくります。

ダイヤの原石である学生達が将来、要支援者のよき理解者となり福祉の増進に熱意を持ち続ける人材となるよう育成に尽力したい。私自身も常に研鑽に努め、調査研究に勤しみ、社会福祉における課題解決に取り組める人材になりたい。そして、今ある人的資産を守り、増やし、必要とされる場面では惜しみなく尽力し、私のために力を貸してくれる仲間を支えられながら、職務にまい進したい。

最高の乾杯のために。



健康で文化的な最低限度の生活





微生物感染症学分野・助教

平山 悟

本年4月1日より微生物感染症学分野の助教に着任致しました、平山悟（ひらやまさとる）と申します。この度、素顔拝見のお話をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

私は横浜で育ちました（時に疎ましく思われがちですが、自信と誇りを持って横浜出身と言っています）。電車の中でも騒がないような、大人しい子供だったと聞いています。近所のスケート場に遊びに出かけたことをきっかけに、5歳からフィギュアスケートを習い始めました。熱心に打ち込んだりそうでもなかったりしながら、15年間続けました。現役時代はもう少し細身の骨格をしていましたが、スケートをやめてから体型が変わり、水泳やってた？バスケやってた？と今ではよく聞かれます。そして寒さにすっかり弱くなりました…。この春に東京から越してきたばかりで、まだ新潟の冬を知らないもので、雪や寒さが心配です。

高校まで横浜で過ごした後、藤沢市の日本大学生物資源科学部（農学部に近いです）に入学しました。湘南の江ノ島に近く、ビーチバレーサークルがあったり、サーフィンしてから授業に来る学生がいたりしました。二十歳でスケートをやめると、これまでできなかったアルバイトをしてみたり（イタリアン居酒屋のホールスタッフでした）、

サクスを習ってみたり（音を出せたらほぼ満足しました）していました。また、環境問題に関わる活動がしたいと思い立ち、アースデイ東京というイベントのボランティア活動に参加しました。ピースフルな雰囲気や、年齢も職業も関係なくフレンドリーに接する仲間が心地よくて、この活動は10年続けることになりました（始めるより、やめることに勇気がいるタイプです…）。

一方、大学4年生からは食品微生物学の研究室に所属しました。そこでは、鹿児島に伝わる福山酢（壺で造る米酢）の発酵に関わる乳酸菌と酵母の相互作用について研究していました。壺に原料を入れて屋外に置くだけで、自然に発酵や熟成が進行する福山酢の原始的な製法は、とても興味深いものでした。この研究を続けながら大学院に進学し、学位を取得しました。

その後、東京の国立感染症研究所に勤め、口腔細菌を扱うようになりました。細菌が放出するメンブレンベシクルと呼ばれるナノサイズの膜小胞をテーマに、歯周病原細菌のベシクルをワクチン抗原に応用したり、ベシクル形成を高速原子間力顕微鏡で観察したり、ベシクル産生量の増大方法を見出したりしてきました。

ところで、現在の趣味はライブ（去年は60公演観ました）とラジオ（週に20番組チェックします）です。陽キャなのか陰キャなのか分からない趣味ですし、歯科医師免許を持たない私ですが、だからこそ別の視点から物事を捉えながら、価値ある研究成果を発表できるよう、また教育活動に貢献できるよう精進致します。今後ともよろしくご厚意申し上げます。

同窓会だより

新型コロナウイルス影響下における新しい同窓会活動

会長（歯学科14期生） 有松 美紀子

新型コロナウイルスの影響により私たちは今まで経験したことがないような時代を送っています。仕事や生活の場でも今まで以上に感染症対策を実施し、健康面だけでなく経済的な問題にも直面しています。しかし、このような状況下にあっても経済的支援が必要となった歯学部学生の報告がないということは幸いです。（令和2年7月末現在）

同窓会の事業も大きな影響を受け、4月に予定していました総会と学術セミナーは中止、その後の学術セミナー、研修歯科医師支援塾等も中止しました。この新しい生活様式が常になり、今後の見通しもつかない中、同窓会事業を見直し、新しい同窓会活動を開始しました。

会議やセミナー等はコロナ禍が沈静化するまでは、多数で参集するという従来の形式ではなく、三役会、理事会、評議会、支部長会議、各種委員会等はZoomやメール会議を利用し行なうようになりました。

さて、現在では、本学同窓生は国内のみならず海外でも活躍する方々が増えています。今後はITを利用して瞬時に世界中の同窓生同士が繋がっていく、そのようなビジョンを持っています。

1月に始まりましたこのコロナ禍の影響により令和元年度新潟大学の卒業式も中止になりましたが、歯学科と口腔生命福祉学科の卒業生には、記念品をお渡しし、学部の3階通路には卒業生ネームプレートを掲示させて頂き、お祝いの気持ちに代えさせて頂きました。両学科合わせて3,000名弱の会員の名前が明記されています。同窓会員の皆さま、保護者の皆さまには、学部にお越しの節

には是非ご覧頂ければと思います（写真1）。

日本中、世界中のどこで活躍していても（写真2）、私たちの帰属する場所は新潟大学歯学部であり、新潟大学歯学部同窓会です。新型コロナの影響により大変大事な事を再確認させて頂くことができました。今後も、目には見えませんが強い絆で固く結ばれた同窓会を目指して参りたいと思います。



写真1：卒業生ネームプレート。歯学部を卒業した全員の名前が載っています。



写真2：令和2年4月に日本歯科大学新潟生命歯学部教授に就任された黒木淳子先生（歯学科27期生）。当会から教授就任のお祝いを差し上げました。当会会員の延べ61人目の教授です。

教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
昇任	R 2 . 4 . 1	竹 中 彰 治	う蝕学分野准教授	う蝕学分野助教
採用	R 2 . 4 . 1	中 村 健	口腔生命福祉学科准教授	
採用	R 2 . 4 . 1	平 山 悟	微生物感染症学分野助教	国立感染症研究所（任期付研究員）
採用	R 2 . 4 . 1	TRAKANANT SUPALUK	口腔解剖学助教	
採用	R 2 . 4 . 1	北 見 公 平	歯科矯正学助教	医歯学総合病院矯正歯科医員
採用	R 2 . 4 . 1	阿 部 達 也	口腔病理学助教	医歯学系（医）特任助教
採用	R 2 . 4 . 1	齋 藤 大 輔	組織再建口腔外科学助教	医歯学総合病院口腔再建外科医員
採用	R 2 . 4 . 1	井 田 貴 子	高度口腔機能教育研究センター特任助教	医歯学総合病院冠・ブリッジ診療科医員
任期満了	R 2 . 4 . 19	小 川 友里奈	口腔保健学助教	
採用	R 2 . 5 . 1	戸 川 瞳	包括歯科補綴学特任助教	
採用	R 2 . 5 . 1	上 原 文 子	包括歯科補綴学特任助教	
採用	R 2 . 5 . 1	落 合 勇 人	摂食嚥下リハビリテーション学特任助教	摂食嚥下リハビリテーション学分野教務補佐員
採用	R 2 . 5 . 1	笹 杏 奈	摂食嚥下リハビリテーション学特任助手	
退職	R 2 . 6 . 30	竹 井 絵 理	摂食嚥下リハビリテーション学特任助手	

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
再雇用	R 2 . 4 . 1	監 物 新 一	高度口腔機能教育研究センター技術職員（再雇用）	
採用	R 2 . 4 . 1	落 合 勇 人	摂食嚥下リハビリテーション学分野教務補佐員	
配置換	R 2 . 4 . 1	中 澤 典 子	学務部教務課教育実施係長	医歯学系歯学部事務室総務係長
配置換	R 2 . 4 . 1	鈴 木 寛 則	自然科学系理学部事務室総務係長	医歯学系歯学部事務室学務係長
配置換	R 2 . 4 . 1	佐 藤 純 奈	総務部人事企画課	医歯学系歯学部事務室学務係
配置換	R 2 . 4 . 1	丸 山 俊	医歯学系歯学部事務室総務係長	財務部財務企画課主任

配置換 R 2 . 4 . 1 山 崎 和 彦 医歯学系歯学部事務室学務係長 自然科学系工学部事務室学務係長
配置換 R 2 . 4 . 1 土 田 彩 乃 医歯学系歯学部事務室学務係 財務部財務管理課
任期満了 R 2 . 4 . 30 落 合 勇 人 摂食嚥下リハビリテーション学分野教務補佐員



病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
所属換	R 2 . 4 . 1	荒 井 良 明	顎口腔インプラント治療部准教授	顎関節治療部准教授
所属換	R 2 . 4 . 1	黒 川 亮	医療連携口腔管理治療部特任助教	顎顔面口腔外科特任助教
所属換	R 2 . 4 . 1	佐久間 英 伸	医療連携口腔管理治療部特任助教	口腔再建外科特任助教
採用	R 2 . 4 . 1	花 崎 美 華	小児歯科・障がい者歯科助教	
採用	R 2 . 4 . 1	高 昇 将	予防歯科助教	冠・ブリッジ診療科医員
採用	R 2 . 4 . 1	遠 間 愛 子	歯の診療科助教	歯の診療科医員
採用	R 2 . 4 . 1	須 田 大 亮	口腔再建外科病院専任助教	口腔再建外科医員
採用	R 2 . 4 . 1	齋 藤 夕 子	顎顔面口腔外科病院専任助教	顎顔面口腔外科医員
採用	R 2 . 4 . 1	佐 藤 由美子	患者総合サポートセンター特任助教	歯科麻酔科特任助教
採用	R 2 . 4 . 1	永 田 昌 毅	高度医療開発センター特任教授	医歯学系（顎顔面口腔外科学）准教授
採用	R 2 . 4 . 1	山 田 葵	高度医療開発センター特任助教	顎顔面口腔外科レジデント
採用	R 2 . 5 . 1	村 上 和 裕	義歯診療科助教	
昇任	R 2 . 6 . 1	新 美 奏 恵	医療連携口腔管理治療部講師	口腔再建外科助教
採用	R 2 . 6 . 1	高 嶋 真樹子	顎口腔インプラント治療部特任助教	顎口腔インプラント治療部医員
採用	R 2 . 8 . 1	佐久間 英 伸	口腔再建外科助教	医療連携口腔管理治療部特任助教
採用	R 2 . 8 . 1	小 川 信	高度医療開発センター特任助教（短時間）	
退職	R 2 . 8 . 31	塩 見 晶		歯科総合診療部助教
退職	R 2 . 8 . 31	中 村 太	歯科総合診療部助教へ	歯科総合診療部医員

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	R 2 . 4 . 1	石 山 茉佑佳	患者総合サポートセンター歯科衛生士	
昇任	R 2 . 4 . 1	黒 木 純 子	東 3 階病棟副看護師長	東 3 階病棟看護師
昇任	R 2 . 4 . 1	稲 川 さゆり	看護職キャリア開発コアセンター特命副看護部長	東 3 階病棟看護師長
採用	R 2 . 4 . 1	池 田 佳 奈	東 3 階病棟看護師	
採用	R 2 . 4 . 1	齋 藤 遥 奈	東 3 階病棟看護師	
採用	R 2 . 4 . 1	山 口 雅 陽	東 3 階病棟看護師	
採用	R 2 . 4 . 1	渡 辺 美 桜	東 3 階病棟看護師	
所属換	R 2 . 4 . 1	寶 來 和 呼	東 3 階病棟看護師長	高次救命災害治療センター看護師長
所属換	R 2 . 4 . 1	渡 邊 悦 子	東 9 階病棟副看護師長	東 3 階病棟副看護師長
所属換	R 2 . 4 . 1	杉 田 茂 子	外来（歯科）副看護師長	東 7 階病棟副看護師長
所属換	R 2 . 4 . 1	石 井 裕 子	外来（歯科）看護師	光学医療診療部看護師
所属換	R 2 . 4 . 1	倉 島 柊	西 8 階病棟看護師	東 3 階病棟看護師
所属換	R 2 . 4 . 1	林 晶 子	手術部看護師	外来（歯科）看護師
所属換	R 2 . 4 . 13	樋 浦 美 樹	外来（歯科）看護師	西 6 階病棟看護師
育児休業復 帰・所属換	R 2 . 4 . 16	田 邊 小百合	東 6 階病棟看護師	東 3 階病棟看護師
育児休業復 帰・所属換	R 2 . 4 . 20	立 川 友季子	血液浄化療法部看護師	外来 4 ・ 5 階看護師
所属換	R 2 . 4 . 30	井 越 加 奈	東 3 階病棟看護師	東 11 階病棟看護師
所属換	R 2 . 4 . 30	桑 原 華 子	東 3 階病棟看護師	東 11 階病棟看護師
所属換	R 2 . 4 . 30	津 田 典 子	東 11 階病棟看護師	東 3 階病棟看護師
所属換	R 2 . 4 . 30	眞 見 美 里	東 11 階病棟看護師	東 3 階病棟看護師
所属換	R 2 . 6 . 7	津 田 典 子	東 3 階病棟看護師	東 11 階病棟看護師
所属換	R 2 . 6 . 7	井 越 加 奈	東 11 階病棟看護師	東 3 階病棟看護師
所属換	R 2 . 6 . 7	桑 原 華 子	東 11 階病棟看護師	東 3 階病棟看護師
所属換	R 2 . 6 . 8	眞 見 美 里	東 3 階病棟看護師	東 11 階病棟看護師

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	R 2 . 3 . 31	藤 江 進	九州大学病院事務部長	事務部長
定年退職	R 2 . 3 . 31	木 村 久 明		管理運営課課長
定年退職	R 2 . 3 . 31	安 井 弘 道		医事課診療管理係長
配置換	R 2 . 4 . 1	清 水 紀 之	財務部財務企画課長	経営企画課課長
配置換	R 2 . 4 . 1	大 熊 忠	財務部財務管理課副課長	経営企画課副課長
配置換	R 2 . 4 . 1	片 桐 孝 昭	研究企画推進部産学連携課副課長	医事課専門員
配置換	R 2 . 4 . 1	小 出 忠 弘	人文社会科学系総務課新潟附属学校係長	総務課専門職員
配置換	R 2 . 4 . 1	矢野目 健	総務部人事企画課人件費・給与計算係長	総務課人事係長
配置換	R 2 . 4 . 1	奥 野 隆 広	総務部総務課法規係長	総務課主任
配置換	R 2 . 4 . 1	野 水 忠 宏	人文社会科学系学務課大学院学務係長	管理運営課契約係長
配置換	R 2 . 4 . 1	井 関 慶 喜	総務部企画課専門職員(経営戦略本部学長室)	基礎・臨床研究支援課研究管理係長
採用	R 2 . 4 . 1	岡 田 俊	事務部長	徳島大学病院事務部長
配置換	R 2 . 4 . 1	小 林 晴 男	経営企画課課長	医歯学系総務課長
採用	R 2 . 4 . 1	雲 崎 雄 次	管理運営課課長	長岡工業高等専門学校学生課長
配置換	R 2 . 4 . 1	太 田 耕 治	総務課副課長	財務部財務企画課副課長
配置換	R 2 . 4 . 1	小 黒 健 児	経営企画課副課長	総務課副課長
配置換	R 2 . 4 . 1	田 澤 由紀子	総務課総務係長	総務課専門職員
配置換	R 2 . 4 . 1	滝 沢 美 穂	総務課人事係長	総務課専門職員
配置換	R 2 . 4 . 1	服 部 正 人	管理運営課契約係長	施設管理部施設管理課総務係長
配置換	R 2 . 4 . 1	稻 毛 友 壽	基礎・臨床研究支援課研究管理係長	財務部財務企画課会計法規係長
配置換	R 2 . 4 . 1	齋 藤 真 紀	医事課患者支援係長	総務課総務係長
配置換	R 2 . 4 . 1	吉 田 淳 一	医事課診療管理係長	医事課収入係長
配置換	R 2 . 4 . 1	斎 藤 こずえ	医事課審査係長	医事課主任
配置換	R 2 . 4 . 1	中 澤 文 子	医事課収入係長	財務部財務管理課支出係長

令和2年度歯学部内委員会

令和2年4月1日

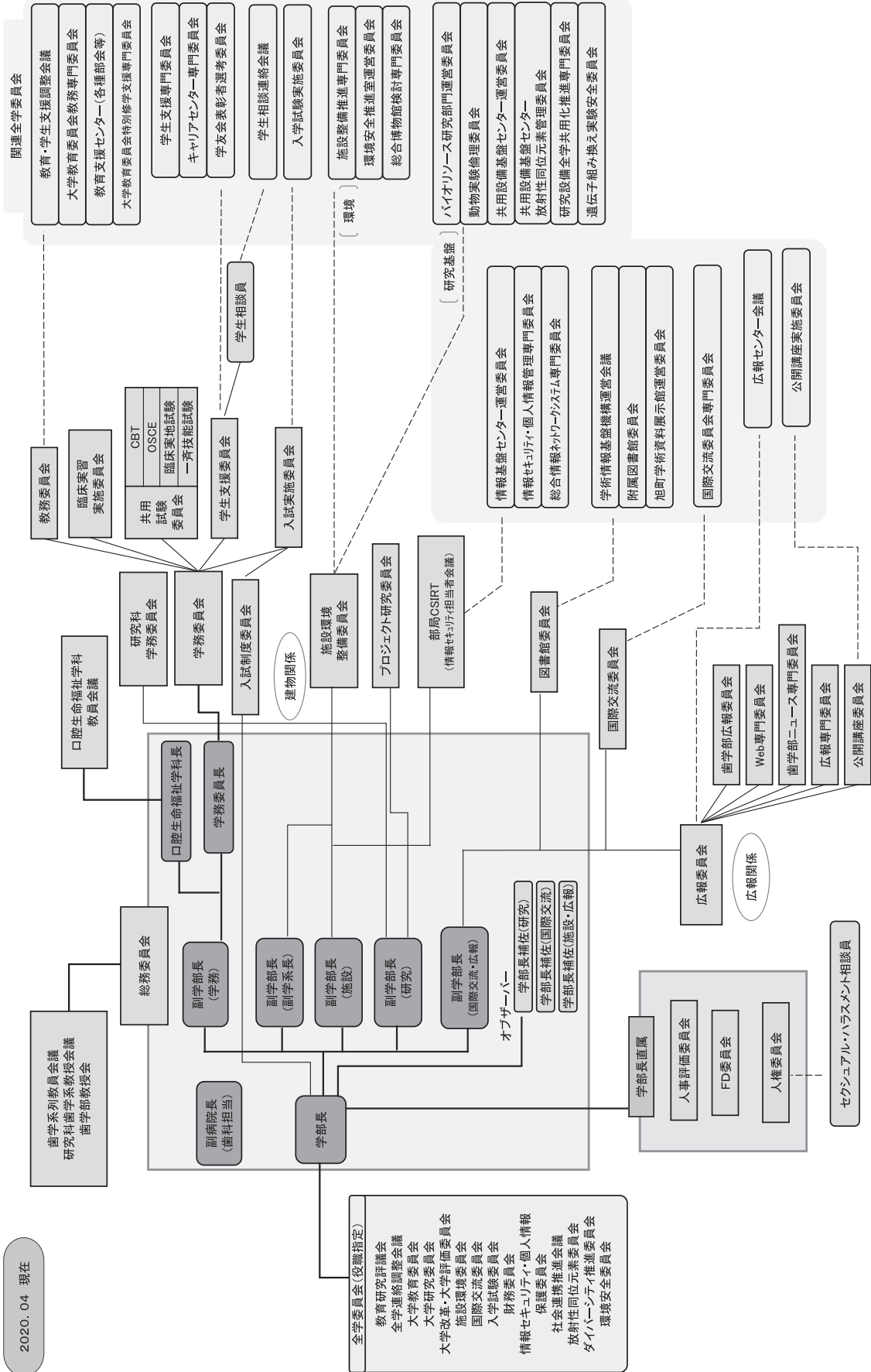
委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
—	前田健康	系列長		任期 31.4.1~R3.3.31
総務委員会	前田健康	歯学部長		総括
	小林正治	副病院長		歯科担当
	大内章嗣	副学部長・評議員		総務
	小野高裕	副学部長・歯学科長		副学系長
	小野和宏	副学部長・学務委員会委員長		学務
	大峡淳	副学部長		施設
	魚島勝美	副学部長		国際交流・広報
	井上誠	副学部長		研究
	照沼美穂	学部長補佐(オブザーバー)		研究
	小川祐司	学部長補佐(オブザーバー)		国際交流
	多部田康一	学部長補佐(オブザーバー)		施設・広報
	葎原明弘	口腔生命福祉学科学科長		
学務委員会	小野和宏	学務委員会委員長	大学教育委員会教務専門委	総括
	井上誠	教務委員会委員長		教務
	佐伯万騎男	入試実施委員会委員長	入試実施委	入試
	山村健介	学生支援委員会委員長		学生支援
	藤井規孝	臨床実習実施委員会委員長		臨床実習
	葎原明弘	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
	大内章嗣	副学部長・評議員		総務
教務委員会	井上誠	教務委員会委員長		総括
	小野和宏			オブザーバー
	林孝文			教育課程(歯学科系)
	大内章嗣			教育課程(口腔生命福祉学科系)
	ステガロク・ロクサーナ			教育課程(口腔生命福祉学科系)
	大峡淳			◎共用試験(CBT)
	石崎裕子			◎共用試験(OSCE)
	多部田康一	(臨床実地試験 総括)		◎共用試験 (診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験)
	吉羽邦彦	(一斉技能試験 総括)		◎共用試験 (診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験)
	臨床実習実施委員会	藤井規孝	臨床実習実施委員会委員長	
吉羽邦彦				◎口腔生命福祉学科臨床実習Ⅱ総括
柴田佐都子				◎口腔生命福祉学科臨床実習Ⅰ総括
伊藤晴江				歯科総合診療部
竹中彰治				予防・保存系診療科
秋葉奈美				摂食機能・補綴系診療科
大島邦子				小児・矯正系診療科
三上俊彦				口腔外科系診療科
共用試験委員会	大峡淳	CBT(副学部長)		必要な都度委員を指名
	石崎裕子	OSCE		必要な都度委員を指名
	多部田康一	臨床実地試験 総括		必要な都度委員を指名
	吉羽邦彦	一斉技能試験 総括		必要な都度委員を指名
学生支援委員会	山村健介	学生支援委員会委員長	学生相談室相談員・学生相談連絡会議	総括
	依田浩子			歯学科
	小松康高			歯学科
	秋葉奈美			歯学科
	諏訪間加奈			口腔生命福祉学科
	佐伯万騎男		学生相談室相談員・学生相談連絡会議	歯学部
学生相談員	伊藤晴江			研究科
	山村健介			
	依田浩子			

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
入試制度委員会	前田 健康	学部長		
	大内 章嗣	副学部長(総務)		
	小野 高裕	副学部長(歯学科長)		
	葭原 明弘	口腔生命福祉学科長		
	佐伯 万騎男	入試実施委員会委員長		
	小野 和宏	副学部長(学務)・学務委員会委員長		
入試実施委員会	山村 健介	学生支援委員会委員長		
	佐伯 万騎男	入試実施委員会委員長	入試委・入試実施委	総括
	野杵 由一郎	前入試実施委員会委員長		補佐
	田沼 順一			
研究科学務委員会	吉羽 邦彦			オブザーバー
	井上 誠	副学部長		総括
	葭原 明弘			教務
国費優先配置特別プログラム運営委員会	泉 健次			学生支援
	石田 陽子			オブザーバー(留学生支援)
	前田 健康	学部長		
	魚島 勝美	副学部長		
施設環境整備委員会	井上 誠	副学部長		
	小川 祐司	学部長補佐		
	石田 陽子			
	小野 高裕	副学部長		総括
	大峽 淳	副学部長	動物実験倫理委員会	
	佐伯 万騎男		施設整備専門委	
共通施設専門委員会	齊藤 一誠			
	寺尾 豊		遺伝子組換え実験安全委	
	加来 賢		総合博物館検討専門委	
	堀 一浩			
	大峽 淳	副学部長		
	部局環境安全衛生管理室	前田 健康	学部長	
部局CSIRT(情報セキュリティ担当者会議)	片桐 涉			環境安全管理担当者
	近藤 正一			事務室長
	林 尚人			衛生管理者
	前田 健康	部局CSIRT責任者		
	西山 秀昌	部局CSIRTリーダー	情報基盤センター運営委	総括
図書館委員会	鈴木 一郎	部局CSIRT副リーダー		IT一般
	黒川 孝一	部局CSIRT副リーダー		
	丹原 惇	部局CSIRT副リーダー		
	近藤 正一	部局情報セキュリティ事務担当者		
国際交流委員会	寺尾 豊		附属図書館委	
	土門 久哲		附属図書館委	
	吉羽 邦彦			
広報委員会	魚島 勝美	副学部長	国際交流委員会専門委	
	照沼 美穂	学部長補佐		
	小川 祐司	学部長補佐		
	多部田 康一	学部長補佐		
	泉 健次			
	長澤 麻沙子			
	柿原 嘉人			
石田 陽子	オブザーバー			
広報委員会	魚島 勝美	副学部長		総括 ◎歯学部ニュー ス専門委
	多部田 康一	学部長補佐		◎広報専門委(学部)
	ステガロク・ロクサーナ			◎広報専門委(学部)
	吉羽 邦彦			◎広報専門委(研究科)
	黒川 孝一			口腔生命福祉学科 ◎学部広報web専門委
	丹原 惇			研究科広報web
堀 一浩		公開講座実施委	◎	

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
歯学部広報委員会 Web専門委員会	黒川孝一			
	竹中彰治			
	濃野要			
	高橋直紀			
	丹原惇			
歯学部ニュース専門委員会	魚島勝美	副学部長		他の委員は准講員、助教層からローテーションで選出
	多部田康一	学部長補佐		学部
広報専門委員会	ステガロク・ロクサーナ			学部
	吉羽邦彦			研究科
歯学部公開講座委員会	堀一浩		公開講座実施委	
プロジェクト研究委員会	井上誠	副学部長		
	小野高裕	副学部長		
	照沼美穂			
	泉健次			
	岡本圭一郎			
臨床系実習室管理委員会	前川知樹			
	小野高裕	委員長		共同技工室、実習準備室
	吉羽永子			臨床基礎実習室、臨床技能評価室、臨床示説室
	小林哲夫			臨床基礎実習室
	魚島勝美			臨床基礎技能実習室
	加来賢			臨床技能自習室
	藤井規孝			臨床実習技工室
人事評価委員会	黒川孝一			歯科行動科学相互実習室
	前田健康	系列長		
	山村健介	任期制教員で基礎系の教授		任期 R2.4.1～R4.3.31
	林孝文	任期制教員で臨床系の教授		任期 R2.4.1～R4.3.31
	丹原惇	任期制教員である准教授、講師及び助教のうちから2人		任期 R2.4.1～R4.3.31
FD委員会	竹中彰治			任期 R2.4.1～R4.3.31
	秋葉陽介	委員長		
	吉羽永子			
	新美奏恵			
	真柄仁			
	伊藤晴江			
	米田博行			
	高橋直紀			
	川崎真依子			
	前田健康	顧問		
小野和宏	オブザーバー			
井上誠	オブザーバー			

臨床実習実施委員会以外で任期の記載のない委員会委員の任期は、平成31年4月1日から令和3年3月31日まで
◎は下部組織を立ち上げる必要のある委員

《歯学部各種委員会》



編集後記

いつも楽しく読ませていただいている歯学部ニュースにも、たくさんの方々のお力があって成されているものだと実感しました。ご寄稿して下さった先生方はもちろんのこと、学生さんにも素敵な原稿を執筆いただいたことに大変感激しております。この感慨に浸りながら、完成した歯学部ニュースをより一層の楽しみをもって拝読させていただこうと思います。最後になりましたが、ご多忙のなか、ご寄稿いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

包括歯科補綴学分野 大川 純平

今回、初めて歯学部ニュースの編集を担当させていただきました。今年度が始まるや否や、コロナウイルスの感染拡大により、オンライン授業の導入、課外活動の自粛、臨床実習の中断等、学生・教職員を取り巻く生活が一変しました。このような状況下にもかかわらず、締め切りまで時間がないうち、執筆を快く引き受けていただいた先生方、学生の皆さんに感謝を申し上げるとともに、編集作業を通じて、学生の「生の声」を聞くことができたことはとても貴重な経験でした。本当にありがとうございました。

予防歯科学分野 久保田 悠

この度、初めて歯学部ニュース編集委員を担当させていただきました。学部生時代と教員になってから2回歯学部ニュースに寄稿させていただく機会がありましたが、今回は歯学部ニュース編集委員の立場から、微力ながらも歯学部の広報活動に携わせていただき、よい経験となりました。最後に、お忙しい中にも関わらず歯学部ニュース原稿執筆にご協力いただきました皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

組織再建口腔外科学分野 齋藤 直朗

この度はお忙しい中、原稿執筆にご協力いただきました先生方、学生さんにこの場をお借りして心より感謝申し上げます。今回初めて歯学部ニュースの編集に関わらせていただきましたが、担当させていただいた原稿の多くでコロナ禍による様々な影響や時に困難が綴られていました。しかし、その中でも希望を持って前を向いて進んでいる学生さんの姿に力づけられました。このような状況だからこそ、これまで以上に、歯学部ニュースが生きた情報発信の場として、読者の皆さんをつなぐ架け橋となることを願っております。

歯周診断・再建学分野 野中 由香莉

今年は新型コロナウイルスの影響で、歯学部生は学部授業も臨床実習も部活動も制限され、例年とは異なるカリキュラムとなってしまいました。「歯学部ニュース」は、ご両親が学生の近況を知る貴重な情報源ということ念頭に、学生中心の構成を心がけました。不安やストレスを抱えながらも、前向きに精一杯頑張る姿が思い浮かぶ内容となりました。新潟大学歯学部の未来は明るいです。

う蝕学分野 竹中 彰治

歯学部ニュース

令和2年度第1号（通算137号）

発行日 令和2年11月13日
発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 竹中 彰治、魚島 勝美
編集委員 大川 純平、久保田 悠
齋藤 直朗、野中由香莉
印刷所 (株)ウィザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮影地：学校町通り（新潟市）

撮影日：2020年5月

使用機材：OLYMPUS PEN-F／M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO／
絞り：F4・シャッター速度：800分の1秒（露出補正-0.7）

裏表紙の撮影データ

撮影地：新潟大学歯学部（新潟市）

撮影日：2020年3月～4月

使用機材：OLYMPUS PEN-F／M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro・
M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO

コメント：思いも寄らぬコロナ禍に見舞われて今春は遠出が困難となり、結果として身近な花々を愛でることとなりました。表紙は7月に閉店を迎えた学校町通りの老舗蕎麦店の白藤を選びました。毎年この時期にこの場所を通るたびに清廉な美しさのため息すら出ていましたが、来年から見られなくなると思うと寂しい限りです。裏表紙は恒例の歯学部の桜の定点観測ですが、日々右往左往した人間界をよそに桜は例年通りの生々流転の相を見せていました。

本誌中の写真の使用機材

ボディ：OLYMPUS PEN-F

レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO

撮影者：林 孝文



リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。